

[43] Crossover

<https://hdl.handle.net/2324/2552910>

出版情報 : Crossover. 43, pp.1-, 2018-03. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



CROSSOVER

No.43 March,2018



九州大学大学院
地球社会統合科学府

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言

今改めて「アジア」とは何か?と問う	中野 等	1
-------------------	------	---

新任挨拶

オーストラリア家族をめぐる政治	藤田 智子	3
-----------------	-------	---

リーディングプログラムレポート

第5回フューチャーアジア創生フォーラム

「新しいメディア時代のアジア-共生社会を目指して-」開催	董 欣	4
------------------------------	-----	---

フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム平成29年度前期授業報告		7
--	--	---

フューチャーアジアプログラム第3期生	坂井 華海	13
--------------------	-------	----

アクティビティ

地球社会統合科学セミナー「ロシア革命100周年シンポジウム:未完の革命

—ユートピア/ディストピアへの欲望」	松井 康浩	14
--------------------	-------	----

日本語教育・言語教育国際ワークショップ

「複言語・複文化環境における言語学習、言語教育」	松永 典子	16
--------------------------	-------	----

アジア埋蔵文化財センターでの学際融合研究の現在とこれから	仙田 量子	18
------------------------------	-------	----

海外レポート

中国・留学体験記	坂井 華海	19
----------	-------	----

Experience at the Annual Meeting of Taiwan

Entomological Society in 2017	黄 悠然	22
-------------------------------	------	----

国内レポート

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」

世界自然遺産登録を目指して：IUCN調査団やんばる視察同行紀	荒谷 邦雄	23
--------------------------------	-------	----

博士論文を書き終えて

日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究	岡田 美穂	26
-----------------------------	-------	----

博士論文を書き終えて	新井 克之	28
------------	-------	----

博士論文を書き終えて	吉澤 聡史	29
------------	-------	----

社会人院生コーナー

地球社会統合科学府修士課程での学びを通して	高久 彩	31
-----------------------	------	----

「越える」社会人学生	高橋 優子	32
------------	-------	----

大学院データブック		34
-----------	--	----

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遙かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

今改めて「アジア」とは何か？と問う

中 野 等

(地球社会統合科学府 副学府長)

クロスオーバーの「巻頭言」は学府長が書くモノとばかり思っていたのだが、昨年(2017年)11月、「突如」その執筆が副学府長の身にまわってきた。承諾はしたものの、さてと沈黙考すること数ヶ月に及び、時間は過ぎれど何を書くべきかは定まらぬまま、正規の締め切りはとうに過ぎて今にいたる。さすがに「巻頭言」を欠くというのはいかにもまずいので、以下では「副学府長」としての肩書きにやや距離をおき、独白めいた駄文をものすことで、ひとまずの責めを果たすこととしたい。

随分と以前のことに比べると、2003(平成15)年から5年間21世紀COEプログラム「東アジアと日本:交流と変容」に関わった。その後、比較社会文化学府から地球社会統合科学府への改組にあたってはアジア重視が謳われ、改組に連動してはじまった「フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラムリーディングプログラム」(略称:フューチャーアジア・プログラム)ではプログラムコーディネーターを勤めた。さらに、いままた全学的課題である「アジア研究教育機構」(仮称)には検討WGのメンバーとして取り組んでいる。

このように「アジア」は常に身近に存在してきたのであるが、実のところ釈然としないものを感じ続けており、そうした想いは今に至って尚募る一方である。あらかじめ断っておくが、もとより「アジア」を対象とする研究・教育を否定するものではない。むしろ「アジア」を研究・教育、さらには実践の「場」としてしっかり位置づけていくための前提が必要なのではないかという想いである。文化史家松枝到氏の言を借りれば、「アジア」とはなにかという問いは、あらかじめ「宙ぶり」にされているのであり、答のないことを見越した問いであるという(松枝到『アジアとはなにか』・大修館書店・2005年)。釈然としないものの正体、あるいはその理由は恐らくこの「宙ぶり」状態に由来するのであろう。

もはや「アジア」という語り口も場合によっては陳腐であり、本来なら「アジア」とは何か?という問いにも蓋をしておきたいのであるが、もろもろの事情からそうもいかず、昨今では不断に「アジア」とは何か?という問いを反芻するような事態に立ち至っている。ザックリ言うと、地理的に定義される

「アジア」とは別に、歴史によって規定される「アジア」があり、政治領域としての「アジア」があり、さらに文化として観念される「アジア」があるのだろう。このほかに、消費される仮想空間のような「アジア」もあるのかもしれない。それはともかくとして、地理的に設定された空間に実態としての「アジア」が存在するかどうかは疑問である。論者によっては「実質的内容がないという点で、「アジア」という記号はかぎりなく無に近いものである。そして「アジア」は、その内容が空虚であるがゆえに様々な指示対象を捉えうるのである。その結果、アジアは多義的な意味をもつことになる」と、「アジア」という記号は限りなく「無に近い」と評価する向きもある(渡辺良智「日本人のアジア認識」・青山学院女子短期大学『総合文化研究所年報』14・2006年)。

なぜそうなったのか?なぜそうなのか?については幾つかの回答が用意されるが、古くから多くの論者が異口同音に主張してきたのが「アジア」が一人称ではないということである。「アジア」というのは、もともとヨーロッパから与えられた規定であって、アジアによる自らの名乗りではない。さらに始末が悪いことに、本来は現在トルコ共和国の位置するアナトリア半島あたりが「アジア」であったものが、その後無規定に拡大していったという歴史的経緯がある。アフリカのこととはしばらく措くとして、「アジア」はヨーロッパの補集合であり、非ヨーロッパ的なものの総称であった。

現在につながっていくという意味での西欧歴史学は19世紀にはじまるが、ここで「アジア」というキャラクターに明確な色づけがなされた。そこでは「歴史はギリシアにはじまる」とされ、アテナイの民主制政治がヨーロッパなるものの原点として高く評価される一方で、「アジア」は発展することのない停滞社会であり、停滞の原因は専制的な皇帝支配にあると考えられた。「マラ톤の戦い」で知られるペルシア戦争はアテナイ(民主的なヨーロッパ)がペルシア帝国(専制的なアジア)に勝利する記念碑的な戦いであり、周知の様にマラ톤の逸話は陸上競技マラソンの起源となる。さすがに現代アジアを「停滞」で形容することは乱暴に過ぎようが、そうした色づけは20世紀の後半まで「アジア」を拘束し、ついこの間まで時代区分論のなかでの「アジア的生産様式」の理解

○○○ 巻頭言

や「アジア的停滞」が盛んに議論されていた。

一方、何のことわりもなく「アジア」と十把一絡げにされる側の反応はどうだろう。同じく19世紀前半の日本の思想家、水戸学の会沢正志斎はその思想性もあって、最もエキセントリックに反応したうちの一人であろう。

西夷はその地を分けて、亜細亞洲・歐羅巴洲・阿夫利加洲と称すれども、夷輩の私に名づくる所にして、天朝にて定め給へる呼称にも非ず。また上古より定りたる公名にも非ざるなり。今彼が私に称する所の亜細亞などの名を以て、神州までもを総称するは悖慢の甚だしきなり。依りてここに彼が私称を用るず。

これは会沢正志斎著の時務論『迪彝編』（1833年）の一節であるが、大意は「亜細亞洲」などという呼称は西洋の夷人が勝手に使っている言葉であり、「亜細亞」という概念で日本（神州）まで取りこもうなどは甚だしい悖慢であるという。悖慢とは「道にもとり人をあなどる」の意であり、要するに他所で勝手に拵えられた「アジア」という名辞のなかに日本を位置づけようとするのは、道理にはずれた侮蔑的所為であり、自らはこの言葉を使わないということである。

会沢正志斎の拒絶をよそに、その後史実としては「興亜」「脱亜」さらに「大東亜」に象徴されるように、肯定であれ否定であれ「アジア」はアジアに許容されていく。それぞれの国や地域に即して、こうした課程を細かく検証することは極めて重要な課題であろう。日本近代史の山室信一氏は「アジアの問題性」を読み解くための視点として「与えられるアジアと創られるアジア」という切り口を提示された（『思想課題としてのアジア』・岩波書店・2001年）。

外部世界から与えられることによってアジアは、自己のものとして再構成され、改めて創り出される必要があった。しかし、それは時に、そこに帰属することへの拒否感を生み、自らのアジア性の否定が図られ、激しい自己嫌悪となってアジアからの脱却、つまり脱亜が試みられることともなったのである。

山室信一氏も指摘されているように、1941年12月、当時の日本政府は「極東」という名称がヨーロッパ中心の世界観の発想であるとして以後用いないことを言明しつつ、翌1942年11月には「大東亜省」を設置している。ヨーロッパ由来の「アジア」が、日本の標榜する世界秩序のなかで「亜細亞」「東亜」として置換されたのである。こうした流れは「アジア」が如何に複雑かつ難解な存在であるかを象徴する。もはや古典ともいべき竹内好の「方法としてのアジア」がそうであるよう、本来「アジア」に対するという営為にはかなりの「緊張感」をともなうはずである。

前にもふれた松枝到氏は「アジアとはなにか。これはアジアの概念規定ではない。アジアをなにと見るべきか、アジアをなにのようにするべきか、そこへ向けての問いである」とも述べている。再論のようにはなるが、「アジア」はアジアとして固定的に存在するわけではなく、空間的にも内実としても不断に変化し、それと相関するように「アジア」を捕捉しようとする視点も一定ではない。正体の定まらない「アジア」はあらゆる意味に於いて決して自明ではないのである。

今後、個人としても地球社会統合科学府としても「アジア研究教育機構」（仮称）の開設に向けて積極的に関与していくことになるが、この機構がより本質的に機能していくためにはこの種の議論も必要なのではなからうか。

オーストラリア家族をめぐる政治

藤 田 智 子

(比較社会文化研究院)

(地球社会統合科学府・社会的多様性共存コース)

私は、2017年10月に比較社会文化研究院に着任しました。幼いころから引っ越しが多く、海外で暮らした経験もありますが、九州で暮らし、働くのは初めてです。また、大学院で教えるのも初めてなので、今まで以上に頑張りたいと思っています。

私の専門は家族社会学・ジェンダー論・オーストラリア研究です。「家族」とはなにか、「家族」とはどうあるべきとされているのかという問いのもと、オーストラリアの家族(に關わる)政策の分析を行うことで、近(現)代社会における国家(state)・家族・ジェンダー・セクシュアリティの關係について考察してきました。特に国家や専門家による上からの統制や介入が家族やジェンダー、セクシュアリティのあり方に与えた影響を検討しています。近(現)代社会において、社会や政府に自らのライフスタイルが「家族」と認められるか否かは、自己のアイデンティティだけでなく、必要な社会的支援やサービスを受けられるか否かにも關わる重要な問題です。われわれの生きる社会において、「家族」は社会的基礎単位とされますが、そこから排除されるとさまざまな差別や不利に直面することになります。一方で、オーストラリアにおいては「家族」が政治的なスローガンとして利用され、「家族とは何か」という家族のあり方に関する問いが社会政策上の重要な論点となってきました。オーストラリアの家族政策をテーマに、政策それ自体の分析のみならず、政策議論の中で家族はどうあるべきとされてきたのか、政策言説の分析を行うことが重要だと考え、研究を行ってきました。

博士論文においては、1970年代以降の家族政策、具体的には家族給付や出産手当、ワーク・ライフ・バランス政策、ひとり親への給付金、家族支援サービスに關わる政策などをめぐる議論を取り上げて、資料調査とインタビュー調査を行い、オーストラリア家族政策の歴史としてまとめました。それにより、オーストラリア家族政策を通して正当化されてきた家族のあり方や、オーストラリア社会におけるジェンダー關係を分析しました。さらに、社会政策をめぐる包摂と排除の問題をジェンダーやエスニシティ、階層の点から分析しました。

その後は、生殖技術・不妊治療の發展が家族のあり方に大きな影響を与えてきたことを考慮し、生殖医療に注目して、より長期的な視点からこれまでの研究を發展させようと試みています。具体的には、オーストラリアで初めて不妊症クリニックが設置さ

れた1930年代以降、「子ども／家族をつくる」のための技術が發展、浸透してきた過程を分析し、家族と生殖の社会史として再構成することを目指しています。それによって、不妊治療の技術開發と政府によるその規制がオーストラリアの家族、女性、セクシュアル・マイノリティにいかなる影響を与えてきたのかを明らかにすることが目的です。

研究を進めつつ、2016年4月から2017年9月までは、千葉県の明海大学に講師として勤務していました。非常勤で教えた経験はありましたが、常勤の教員として大学で教え、学科の運営に關わるのは初めてでしたので、多くのことを学びました。大学のことはよく分かっているつもりでしたが、実際教員として管理・運営に關わってみると、学生の視点から見ていたときは全く違いました。学生目からは見えない現在の大学の置かれている状況を目の当たりにして、考えさせられることも多くありました。しかし、それまで以上に学生さんと一緒に学ぶことの楽しさを実感することもできました。九州大学では大学院の授業が中心となりますので、学生さんと活発な議論ができることを期待しています。

社会学においては社会学的想像力が重視されます。それは、私たちの個人の生活とよりマクロなレベルの社会構造や歴史との複雑な關係を把握する力です。特に、家族やジェンダー、セクシュアリティについて学び、研究することは、私たちの身近な出来事にはどのような社会的・文化的・歴史的・政治的背景があるのか、より幅広い文脈のなかでそれらを捉えることの重要性を教えてください。「個人的なことは政治的」だからです。さらに、普段われわれが「あたりまえ」だと思っていること、あるいはあたりまえ過ぎて意識さえしていないことに疑問を持ち、批判的に考察することの重要性も教えてください。家族やジェンダー、セクシュアリティに關する問題に興味のある方には、ぜひ私の授業を履修してほしいです。さらに、オーストラリアに興味のある方も大歓迎です。私の授業では、ディスカッションを特に重視していますので、ぜひ積極的に参加してもらいたいです。教室でお会いしましょう。

第5回フューチャーアジア創生フォーラム 「新しいメディア時代のアジア-共生社会を目指して-」 開催



会場の様子

フューチャーアジア・プログラムでは今年で第5回目となるフューチャーアジア創生フォーラムを平成29年11月23日に西新プラザにて開催しました。本フォーラムは、プログラムの一環としてアジアにおける社会問題に対して様々な形で発信している3名の方々を招待し、講演を通して新しいメディア時代における社会問題への取り組みについて、発信・共有を行うとともに、来場者に刺激を受けていただくことを目的としています。

今年度は「新しいメディア時代のアジア-共生社会をめざして-」をテーマに、市民による発信力の強化に貢献するべく設立されたNPO法人「8bitNews」の代表であり、ジャーナリストで、キャスターでもある堀潤氏をメインゲストに迎え、社会の様々な分野で活躍する専門家達が社会的なマイノリティーの抱える課題について実体験に基づいた講演を行いました。

講演者：

- 堀潤氏（メインゲスト）（ジャーナリスト／キャスター）
- 朴康秀氏（北九州市立若松中央小学校民族学級講師、福岡市人権啓発センター講師）
- 于寧氏（東京大学大学院博士課程）

董 欣
(フューチャーアジアプログラム1期生)
(博士後期課程2年)

講演会はフューチャーアジア・プログラムのプログラム生2名が司会進行を務め、地球社会統合科学府の学府長であり、プログラム責任者でもある小山内康人教授による主催者挨拶とフォーラムの趣旨説明より開始となりました。



フューチャーアジア・プログラム生による司会進行



主催者挨拶(小山内康人学府長)

基調講演では堀潤氏が「個人発信の時代に考えること」をテーマとして、講演を行いました。



基調講演(堀潤氏)

朴康秀氏は「ヘイトスピーチの実相～路上、ネット、書籍、マスコミなどから社会が壊されていく!」をテーマとして、講演を行いました。



講演(朴康秀氏)

于寧氏は「新しいメディア時代のクィア運動：中国における性的マイノリティによる「映像実践」をめぐる」をテーマとして、講演を行いました。



講演(于寧氏)

講演終了後は来場者から講演者全員に対する質疑応答の時間を設け、来場者からの率直な質問に講演者が直接回答する機会を持ちました。



講演者への質疑応答

今回のフォーラムはフューチャーアジア・プログラム生が「率いる力」を養うため、一から企画し運営しました。2017年7月から4ヶ月を経て、ミーティングを何回も繰り返した上で実際に企画と運営を行った成果です。講演を通じた勉強だけではなく、フォーラムの企画と運営自体から得た合意形成、リーダーシップ、チームワークなどの実践経験はプログラム生にとって大切な成長の機会となりました。



プログラム生によるフォーラム企画・運営の様子

○○○リーディングプログラムレポート

現代社会において新しく生じている社会問題の発信と共有

8bitNews Cybercrime Social (in)justice Gender inequality
 映像祭 Censorship Diversity and coexistence
 Sustainable society Marginalization SNS LGITQIA
 ヘイトスピーチ

第5回フューチャーアジア創生フォーラム

新しいメディア時代のアジア

— 共生社会を目指して

11/23 (木・祝)
 12:30~15:15

九州大学西新プラザ大会議室
 (早良区西新2-16-23)

入場無料

朴康秀 福岡市人権啓発センター講師
 北九州市立若松中央小学校民族学級講師

于寧 東京大学大学院博士課程

堀潤 ジャーナリスト/キャスター
 市民ニュースサイト「8bitNews」代表

申込方法 「フューチャーアジア」で検索し、専用フォームから申し込み
 検索・スマートフォンからはこちら

【会場】九州大学西新 国際社会科学研究科
 「フューチャーアジア創生を推進する6族色学級型リーディングプログラム」
 福岡北九州市早良区早良1-16-1(早良キャンパス) 会議室 115号室(115号棟) 115号棟 国際社会科学研究科
 〒815-8501 電話 092-802-5570 E-mail: event@isgs.kyushu.ac.jp

堀潤 ジャーナリスト/キャスター
 市民ニュースサイト「8bitNews」代表

1977年生まれ。立教大学文学部卒業後、2001年にNHK入局。「ニュースウオッチャー」リポーター、「8bitNews」キャスターを担当。2012年、アメリカロサンゼルスにあるICJAで寄稿研究員として留学。11月の震災メモリアルイベントで出演したドキュメンタリー映画「東洋のMothership」を制作し、その後も、2011年以降の9年間に、現在は「THE VOICE」で「モーニングニュース」キャスター、「100% JAPAN THE WORLD」スーパーバイザーを務めるほか、「rman」や子供版ARJ「ジュニアエラ」等でも活躍を持つなど幅広く活動中。2017年4月、真いことをしている人達に、発信を後押しするプロジェクト「GARDEN」(<https://gardenjournalism.com/>)をスタートさせる。

著書
 福島のニュースルーム革命 福島のテレビを食える。福島のニュースを食え(2013/9/12 改題)
 福島のメディアで見たこと(2013/9/18 改題)
 福島のメディアで見たこと(2013/9/18 改題)
 福島のメディアで見たこと(2013/9/18 改題)
 福島のメディアで見たこと(2013/9/18 改題)

朴康秀 北九州市立若松中央小学校民族学級講師
 福岡市人権啓発センター講師

1964年、佐賀県生まれ。1980年より福岡市で在日コリアンの民族教育「ニー文化塾」を毎年開催し、在日コリアンと日本人との多文化交際のマダニ(広場)を実践している。1988年より北九州市立若松中央小学校の民族学級講師を務め、民族教育を推進。現在は、自身の活動を基に在日コリアンの人権やヘイトスピーチ問題に取り組み、多文化共生社会の実現に取り組んでいる。

于寧 東京大学大学院博士課程

1987年、中国山東省生まれ。2010年東京大学日本学専攻卒業。東京大学大学院総合文化研究科地域文化科学研究専攻専攻文化政策コース博士課程に在学中。専攻は中国現代史、タイア理論。特に中国本土における性的マイノリティによる社会変革に注目し、「クワイア・ビジュアル・クワイア・ビジュアル」として活動を行っている。論文に「北京同性愛者運動：現代中国における性的少数者の文化政治について」(彼女の21世紀)が、LGBTを推進の影で2017年7月掲載。

第5回 フューチャーアジア創生フォーラム

新しいメディア時代のアジア—共生社会を目指して

2017年11月23日(木・祝) 12:30-15:15(開場12:00)

【対象者】 どなたでも参加できます。ただし、定員に達し次第、受付を截止します。

【申込方法】 「フューチャーアジア」で検索し、専用フォームから申し込みください。

【プログラム】

1. 主催者挨拶 (12:30-12:40)
2. 講演 (12:40-13:40)
 朴康秀 <ヘイトスピーチの撲滅—路上、ネット、マスメディア、言論などから社会が編みだされてく！>
 于寧 <新しいメディア時代のクワイア運動：中国における性的マイノリティによる「映像実践」をめぐって>
3. 基調講演 (13:45-14:45)
 堀潤 <個人発信の時代に考えること>
4. 質疑応答 (14:45-15:15)

【お問い合わせ】 九州大学国際社会科学研究科 グローバルプロジェクト推進室
 〒819-0395 福岡市西区元町744(伊都キャンパス)
 TEL: 092-802-5570
 E-mail: event@isgs.kyushu.ac.jp
 HP: <http://isgs.kyushu.ac.jp/FutureAsia/>

入場無料
 事前申し込み (専用フォームから) 検索・スマートフォンからはこちら

「フューチャーアジア」で検索し、専用フォームから申し込み
 検索・スマートフォンからはこちら

プログラム生が作成したフォーラム開催案内ポスター/チラシ

フューチャーアジア創生を先導する 統合学際型リーダープログラム 平成29年度前期授業報告



本プログラムは、産学官民の連携による、地球社会的視野に立つアジア・イノベーション人材の育成を目的とする博士課程教育プログラムです。

平成29年度の前期はプログラム三期生を対象としたプログラム授業である「フューチャーアジア研究Ⅱ」と「フューチャーアジア連携プロジェクトⅡ」を開講しました。プログラムでは平成29年度より全てのプログラム授業を基礎科目「統合学際研究法」として地球社会統合科学府生に広く開放し、プログラムの成果を学府全体に還元しています。

平成29年度前期に実施したプログラム授業について以下に紹介します。

研究計画書の書き方合宿

昨年度は8月に実施した「研究計画書の書き方合宿」を、今年度は日本学術振興会特別研究員の申請時期に合わせて4月中旬に1泊2日間で実施しました。

1日目は地球社会統合科学府の荒谷教授、鬼丸准教授を講師として、採択される申請書の書き方についての講義を伊都キャン

パス比文言文棟にて行いました。講義に続いて、教員1名と学生2~3名を1グループとして、事前に提出された研究計画書に対する個別指導を行いました。その後、大分の九重共同研修所に移動し、2日目は引き続きグループワーク形式による授業を行いました。教員による指導はもちろん、学生同士がお互いの研究計画書を読み討論することで、異なる視点で見直すこともでき、大変有意義な2日間となりました。



研究計画書の書き方合宿

○○○ リーディングプログラムレポート

プレゼンテーション実践ワークショップ

株式会社トライログの平山猛先生を講師として、自分の考えを相手にわかりやすく伝え、共感してくれる人を増やすためのプレゼンテーション手法に関するワークショップを行いました。

授業では話をわかりやすくするための手法として、PREP法【Point（結論）Reason（理由）Example（裏付け）Point（まとめ）の4段階で話を論理的に組み立てる手法】とホール・パート法【相手に伝えたい結論（Whole）を話の最初に提示し、次にそれについての詳細（Part）を説明して、最後にもう一度結論（Whole）に戻って話を締めくくる話し方】について、「私が今、はまっていること」や「海外留学することのメリットとデメリット」などを例題として、実習を通して学びました。その後、授業で学んだPREP法とホール・パート法を使って、「私の研究はどのように社会に役立つことができるか?」をテーマにそれぞれ3分間でプレゼンテーションを行いました。



プレゼンテーション実践ワークショップ

多様性理解に関する実践ワークショップ

株式会社LbE Japanの北浩一郎先生を講師に招き、多様性に関する理解を深め、それに対してどのように取り組むべきかを考えることを目的として、留学生を交えた英語によるワークショップを実施しました。

授業ではまず参加者のバックグラウンドを共有したあと、それぞれの考える多様性の定義について議論を交わすことを通して、「多様性」という概念のもつ複雑さについて認識を共有しました。その後、教育の分野における構成主義に基づく方法論や、マーケティングの分野で進んでいる大衆から個人へという流れの中で多様性のもつ意味を再考しつつ、多様性を理解し、活用することの意味や目的について活発な議論を行いました。



多様性理解に関する実践ワークショップ

国際協力プロジェクト・マネジメント手法

JICAの吉田憲先生を講師として、「国際協力プロジェクト・マネジメント手法」の授業を実施しました。

授業ではまず、国際協力の現場で広く用いられているPCM（Project Cycle Management）手法の目的やその概要、利点・欠点や進め方などについて、注意点を踏まえた講義を行った後、「関係者分析」→「問題分析」→「目的分析」→「プロジェクトの選択」という具体的な流れを発展途上国における母子保健改善計画や小学校教育を受けていない子供の問題を例にとり説明がなされました。最後にそれらの知識を使って架空の「ケソコ市バス公社」による都市の交通問題解決を事例として、ワークショップ形式によるプロジェクト立案の演習を行いました。



国際協力プロジェクト・マネジメント手法

東アジアにおける文理融合研究の可能性

地球社会統合科学府の教員と韓国の梨花女子大学の研究者による合同・統合学際研究会「東アジアにおける文理融合研究の可能性」を実施しました。

研究会では午前中の第1部では梨花女子大学の研究者による以下の研究発表を行い、その後地球社会統合科学府の松井康浩教授、森裕介准教授を交えた討論を実施しました。

- メディアの側面からみるバイオ・アートの特性
(ジョン・ヘスク 副教授)
- ポスト・ヒューマン時代において「人間の本性」はいまだ有効な概念か? (チョン・ヒョンドウク 助教授)
- 文学研究におけるテーマ分析とマルチ・メディア時代における文学教育 (オ・ユノ 助教授)

午後の第2部では地球社会統合科学府の教員による以下の研究発表を行い、その後梨花女子大学のキム・ジニ副教授、キム・ビョンジン研究教授を交えた討論を実施しました。

- 熊本震災調査と学際研究 (三隅一人 教授)
- 日本研究・日本語教育の統合から文理融合へ
(松永典子 教授)
- 統合的学際性の実現に向けての取り組みの紹介
(施光恒 准教授、発表: 波潟剛 准教授)



東アジアにおける文理融合研究の可能性

伊都キャンパスで考える生物多様性

地球社会統合科学府の荒谷邦雄教授を講師として、「伊都キャンパスで考える生物多様性」の授業を実施しました。

授業では最初に生物多様性保全の重要性や問題点、九州大学伊都キャンパスの生物多様性保全ゾーンの概要・現状について講義を行いました。特にキャンパス移転にあたって造成用地内の種をひとつも減ぼさず、森林面積を減らさないという九州大学の生物多様性保全計画は「Science」誌にも掲載されるなど、世界が注目した取り組みであるということが紹介されました。その後、実際に生物多様性保全ゾーンにてフィールドワークを行い、そこで実施されている動植物保全の取り組みについて、クワガタなどの昆虫採取や山桃などの果物の味わいを楽しみながら実地研修を行いました。



伊都キャンパスで考える生物多様性

モスクで学ぶ多文化共生社会のあり方

福岡市にあるモスク（イスラム教の礼拝所）「福岡マスジド アンヌールイスラム文化センター」を訪問し、日本に暮らすイスラム教徒との交流を通して多文化共生社会のあり方を学びました。

授業ではまず、福岡マスジドの館内を案内頂き、礼拝所やイスラム教の聖典「クルアーン（コーラン）」等を視察し、イスラム教についての一般的な説明を受けた後、実際にモスクを訪れていたイスラム教徒との交流を行いました。その後、九州大学医学部百年講堂に移動し、アラブイスラム学院イマーム研究院のサイド佐藤氏による「ラマダン」についての講演会に参加しました。講演後はイスラム教徒の断食明けの食事「イフタル」に参加することで、来場者に対して振舞われた料理を楽しみながらイスラムの文化に触れる貴重な機会となりました。



モスクで学ぶ多文化共生社会のあり方

○○○リーディングプログラムレポート

プログラム研修報告と相互評価

プログラム生の活動成果を共有することを目的として、プログラム三期生の企画・運営により、フィールド調査などの研修報告と自己評価、およびそれに対する相互評価を実施しました。

プログラム生は司会、ファシリテーター、発表者という役割を分担しつつ、それぞれが研究活動費を活用して実施したフィールド調査・インターンシップ参加・学会発表などの活動について、プログラム生同士がお互いの報告を評価し合い、より良い成果報告について考える場を持ちました。プログラム生各自の研究テーマは異なりますが、それゆえに気付くこともあって活発な意見が交わされ、この授業を企画・運営したプログラム三期生にとっても有意義な経験となりました。



プログラム研修報告と相互評価

アジアの課題解決に向けた国連の取組み

国連難民高等弁務官 (UNHCR) 駐日事務所の小坂順一郎氏を講師として招き、国連機関としてUNHCRがどのようにして近年の難民問題に取り組んでいるのか、また駐日事務所がどのような役割を果たしているのかについて講義を行いました。

授業ではまず、難民支援機関としてのUNHCRの特色や国連全体におけるUNHCRの位置付け、予算などUNHCRの組織概要について紹介があった後、UNHCRの事業内容や直面している課題について、現在の世界情勢と難民を取り巻く状況の変化を踏まえて説明がありました。その後、駐日事務所の役割と小坂氏自身が活動に従事したウガンダ共和国北部における南スーダン難民の支援活動について、実体験を踏まえた臨場感溢れるお話を頂きました。



アジアの課題解決に向けた国連の取組み

外国人児童教育を通して見る多文化共生社会のあり方

福岡市立内浜小学校を訪問し、小学校における外国人児童に対する教育現場を体験することで、外国人の増加する地域の抱える課題や将来の多文化共生社会のあり方について理解を深めました。

授業ではまず、内浜小学校で定期的に行っている日本語教室夏期補習に参加し、様々な出身国を持つ児童に対して学生達が直接日本語や算数などを教える機会を設けました。その後、池田芳江先生と村山あすか先生による講義を実施頂き、日本における外国人児童の現状や、福岡市における外国人児童教育の抱える課題などについて説明がありました。授業に参加した児童へのアンケートでは学生達への感謝の言葉もあり、児童と学生の双方にとっても充実した時間となりました。



外国人児童教育を通して見る多文化共生社会のあり方

博物館で学ぶ文理融合の実践

九州国立博物館を訪問し、文化交流展特別展示「水の中からよみがえる歴史-水中考古学最前線-」とバックヤードを見学することにより、地球社会統合科学府の理念である文理融合の実践について、国立博物館の視点から学びました。

まずは小泉恵英学芸部長より、九州国立博物館設立の経緯

についてパンフレットには書かれていない内容を含めたお話を数多く伺いました。続いて博物館科学課佐々木蘭貞先生より、水中考古学の神秘に関してスライドを使ってのご講義を頂きました。その後はバックヤードツアーで普段見ることのできない博物館の裏側、収蔵庫、文化財保存修復施設、免震層等を見学させて頂きました。特にX線撮影室では阿修羅像をはじめ全国の貴重な仏像が多く乗せられたというCTスキャン機器の実物をみせて頂きました。



博物館で学ぶ文理融合の実践

大学における災害後の取り組み

2016年4月に発生した熊本地震の際に被災者支援を行った熊本学園大学社会福祉学部より中地重晴教授を講師に招き、大きな災害が発生した際に大学としてどのような支援が可能なのか、実際の経験に基づいた講義を実施頂きました。

授業ではまず熊本地震の概要について説明頂いたあと、熊本学園大学による被災者の支援活動として、大学の施設や社会福祉学部の知識・経験を活用した避難所の運営や、学生によるボランティアセンターの活動について紹介頂きました。その後、震災の2次被害として、アスベスト問題・科学物質汚染などについてお話頂きました。最後に、阪神淡路大震災も経験された中地先生より「地震は忘れた頃にやってくる。普段から心掛けること」との言葉を頂きました。



大学における災害後の取り組み

○○○ リーディングプログラムレポート

【平成29年度前期フューチャーアジア・プログラム授業】

【フューチャーアジア研究Ⅱ】

講義名	講師（敬称略）	開講日
研究計画書の書き方合宿	地球社会統合科学府複数教員（地球社会統合科学府）	2017/4/15,4/16
国際協力プロジェクト・マネジメント手法	吉田 憲（国際協力機構（JICA））	2017/6/8
東アジアにおける文理融合研究の可能性	波瀾 剛（地球社会統合科学府）	2017/6/16
アジアの課題解決に向けた国連の取り組み	小坂 順一郎（UNHCR 駐日事務所）	2017/7/8
大学における災害後の取り組み	中地 重晴（熊本学園大学）	2017/8/4

【フューチャーアジア連携プロジェクトⅡ】

講義名	講師（敬称略）	開講日
プレゼンテーション実践ワークショップ	平山 猛（株式会社トライログ）	2017/5/18
多様性理解に関する実践ワークショップ	北 浩一郎（株式会社 LbE Japan）	2017/5/25
伊都キャンパスで考える生物多様性	荒谷 邦雄（地球社会統合科学府）	2017/6/22
モスクで学ぶ多文化共生社会のあり方	サイド佐藤 （アラブイスラーム学院・日本ムスリム協会）	2017/6/23
プログラム研修報告 & 相互評価	森 裕介（地球社会統合科学府）	2017/7/13
外国人児童教育を通して見る 多文化共生社会のあり方	池田 芳江・村山 あすか（福岡市立内浜小学校）	2017/7/27
博物館で学ぶ文理融合の実践	博物館スタッフ（九州国立博物館）	2017/8/3

【フューチャーアジア・プログラム第3期生】



坂井 華海

包括的東アジア・日本研究コース
修士課程1年

私は、現在「近代における日本人の“中国”認識形成」をテーマに、歴史学の分野で研究に取り組んでいます。大学院入学後、後期から1年間休学し、中国政府奨学金生として復旦大学に留学していました。

復学後は、前述した修論課題とは別に、プログラム生として「留学生ネットワークを活かしたインバウンドの可能性-九州・熊本県を例として」という課題を設定し、熊本県の「くまラボ」研究員としても活動しています。

私は熊本県出身で、大学院入学後間もなく発生した熊本地震で、家族や多くの友人・知人が大変な苦勞している中、「自分に

できることは何か」と思い巡らすだけで、何もできないまま中国留学へ行きました。

「思いをカタチにできないもどかしさ」、「有言実行の難しさ」は、それまでも日頃から思っていたことですが、この1年間あまりの様々な出来事と経験が、随分と私を変えました。能力不足でまだまだ追いつかないこと、周囲に迷惑を掛けることもありましたが、修士論文もプログラム生としての活動も、後悔のないよう日々コツコツと努力していきたいと思います。

地球社会統合科学セミナー 「ロシア革命100周年シンポジウム：未完の革命— ユートピア / ディストピアへの欲望」

松 井 康 浩

(地球社会統合科学府)

昨年(2017年)はロシア革命百周年に当たり、今では省みられることの少ないこの革命やその世界史的インパクトを再考する催しや出版企画が国内外で目白押しとなった。私も叢書『ロシア革命とソ連の世紀』全5巻(岩波書店刊)の編集委員の一人を務め、特にその第2巻『スターリニズムという文明』の責任編集及び分担執筆に従事した。

この叢書は、ロシア革命とそこから生まれたソ連や社会主義体制を多角的に再考するオーソドックスなアプローチを採用している。ただ私自身は、この出版企画に関わりながら、趣向の異なる革命100周年イベントができないか、と頭を巡らせてもいた。そこで、地球社会統合科学府の支援を受け、比文・言文の「同志(товарищи)」の知恵も拝借しながら、「未完の革命：ユートピア/ディストピアへの欲望」と題したシンポジウムを企画・開催したわけである。

ポリシェヴィキの政権奪取に始まる10月革命は、世界最初の社会主義革命に位置付けられ、それ故、社会主義のイデオロギー、共産主義社会のユートピアは革命とその後のソ連の歩みや影響力を考える場合に欠かせない。しかし、そのユートピアが掲げられた足元で、スターリンの「大テロ」というディストピアが広がりを見せたように、この革命は、夢と悪夢、希望と絶望を合わせ鏡のように示した。本シンポの討論者の役割を引き受けてくれた熊野直樹氏(法学研究院)が「地獄への道は善意によって敷き詰められている」というフレーズをコメントに援用したように、ロシア革命を再考するにあたってこの視点は欠かせず、かつこのフレーズの射程は現在にも延伸可能である。つまり、ディストピアに転じるユートピア志向は、「未完の革命」として、今なお無視しえない形で私たちの社会に生き続けているのではなかろうか。本シンポが、ロシア革命が解き放ったユートピア/ディストピアへの欲望を様々に再考することを目指したのは、現代的問題関心にも突き動かされてのことであった。

以上を多少敷衍すると、新しい人間による新しい社会づくりを目指したロシア革命には「ポスト・ヒューマン時代」の展望が含

まれていたのではないかと、とも言い換えられる。科学やテクノロジーが同時多発的、自己組織的に進化し、人の能力の拡張が可能になり始めた現在、ポスト・ヒューマン時代が間近に控えているようで、そこにロシア革命を歴史の教訓としても再考する意義が浮かび上がる。基調講演をお願いした上野俊哉先生(和光大学)には、以上の趣旨を大まかに伝えたくて、自由に語って頂いた。

地球社会統合科学セミナー
ロシア革命100周年シンポジウム

未完の革命

—ユートピア / ディストピアへの欲望—

基調講演 (13時～14時30分)
上野 俊哉 (和光大学 教授)
主編著作『ロシア革命とソ連の世紀』全5巻(岩波書店刊) 第2巻『スターリニズムという文明』の責任編集
【『世界の未来』1990年代から『世界の未来』(岩波書店)】
【『世界の未来』1990年代から『世界の未来』(岩波書店)】

パネル報告とディスカッション (14時50分～18時)
歴史の中のユートピア / ディストピア

1. 人体改造の究極、あるいは遺伝子の共産主義
報告者 熊野直樹 (九州大学大学院法政文化研究院)
2. ノスタルジーとユートピア—昭和30年代ゲームをめぐって
報告者 松井康浩 (九州大学大学院地球社会統合科学府)
3. 「道の中」を走り続けるという夢
—ロシア革命が野き放ったもう一つの近代
報告者 丸丸 武士 (九州大学大学院地球社会統合科学府)
4. 転向コミニストの夢—最後のユートピアとしての人類
報告者 松井康浩 (九州大学大学院地球社会統合科学府)

パネル・ディスカッション
討論者：上野 俊哉、熊野直樹 (九州大学大学院法政文化研究院)

開 会 (18:00)

2017年
9月30日(土)
13時～18時
(12時30分開場)
事前申込不要・入場無料

会 場
JR博多シティ
10F大会議室C/D

問 合 せ
松井康浩 (地球社会統合科学府)
E-mail: masaki@ccs.kyushu-u.ac.jp

【主催】九州大学大学院 地球社会統合科学府

現代思想や現代社会・文化を縦横無尽に語り、多数の著作を著してきた上野先生だけに、その講演内容をまとめるのは難しい。ただ、ガタリの議論を縦軸に、ボグダーノフらロシアの思想家をも取り上げたマーク・マッケンジー『モラキュラー・レッド：人新世の理論』を横軸に置きながら、普通は並びたないミュー

ジシャン、映画作品、思想家、小説家を遡上へのせ、しかもそれらを単線的なストーリーにまとめるのではなく、縦軸と横軸で作られた広がりある平面に配置した上野先生の講演はとても魅力的で、見事としか言いようがない。議論の中身はもちろん、語りの形としても大いに学ぶところがあった。一言だけ、中心主題に言及すれば、人間を特権視せず、人間を含むあらゆる「物」をフラットにとらえるエコロジー思想、人間がいよいよがこが存在する有無を言わさぬ決定要因、それを哲学的に基礎づける思弁的実在論、オブジェクト指向存在論、言い換えれば「新しい唯物論」の可能性を探るものであった。私自身は、それを、ユートピアでもディストピアでもないポスト・ヒューマンを語る試みとして受け止めた。言語論的転回に飽きたといっは言い過ぎだが、ポスト言語論的転回を展望したい私自身にとっても、さらなる思考を巡らすための手掛かりが得られた気がする。

上野講演に最も深くかわかる報告が、佐藤正則氏（言語文化研究院）の「人間改造の実験、あるいは遺伝子の共産主義」であった。医者であり、哲学者であり、かつ革命家でもあったボグダーノフの血液交換の実験、遺伝子の共産主義ともいえる遺伝子の共有・プール化の構想、機械と人間を一つのシステムに融合させるアイデアなどなど、ロシア革命後の知識人をとらえた人体改造、新しい人間作りのプロジェクトは荒唐無稽なようで、しかし先駆的にも見える。佐藤氏は、人間改造の構想が、一部の知識人とどまらず、西洋の人間観を乗り越えんとしたボリシェヴィキ指導者に広く深く浸透していたことを主張する。世界と人間を切りはなす考えを克服し、生命と無機物を統一的にとらえることを模索したボリシェヴィキの思考には、思弁的実在論などの現代哲学の流れに共鳴するところがあるのはおそらく間違いない。

続く本学府の波瀾剛報告は、「ノスタルジーとユートピア：昭和30年代ブームをめぐって」と題して行われた。世紀転換期に現れた昭和30年代ブームの中核に位置した映画「ALWAYS 三丁目の夕日」を主要な題材とし、その時代を体験したことのない学生が、この映画を見て「懐かしい」という感想を漏らすのはなぜか、その問いを手掛かりに、ノスタルジーとユートピア、イデオロギーとユートピアの関わりを考察したものである。過去を意味あるものに作り変え、現実を否定するユートピアを過去に見出す手法、この映画でいえば、家族の絆、人間の絆の物語がalways=永遠に続く「集団の夢」として描かれる手法が体験してもいない過去に懐かしさと呼び起こした可能性が指摘される。現状を肯定する社会統合、集団のアイデンティティを維持する機能として働くイデオロギー（P・リクール『イデオロギーとユートピア』）がそこに見出されたわけである。しかし、「三丁目の夕日」を強く意識しながらも、異なるメッセージを発する作品が次々と作られている現代映画の動向も併せて紹介され、映画批評を通じた現

代社会分析の可能性を感じさせるものであった。

第三報告は鬼丸武士（本学府）「『頭の中』を取り締まるという夢—ロシア革命が解き放ったもう一つの近代」である。ロシア革命以降、共産主義が世界中に伝播し、各国の権力者はその思想に染まった人たちを見つけ出し、革命を予防しなければならなくなった。「社会の安全」のために政治情報警察が作られ、監視・情報収集が行われるようになったのである。鬼丸報告では、英国植民地に当初築かれたこの仕組みが本国に持ち込まれ、展開していった経緯に触れながら、それを頭の中を可視化するための「ガラスの家」構築をもくろむ権力者の夢=ユートピアに位置付ける。しかし、さらに重要なことは、それが対テロリズム対策とも結びつきながら、バージョンアップされた形でいまの社会に持ち込まれている現状である。生体認証など進化するテクノロジーは、国家権力者のみならず、一般個人の参入をも可能にし、「ガラスの家」を超えた監視社会の到来を招いている。「社会の安全」という未完のユートピアはディストピアに転じないか、気がかりである。

最後の報告は松井が務めた。紙幅の都合もありごく簡単にまとめると、「転向 коммуニストの夢—最後のユートピアとしての人權」と題した本報告では、S・モイン著『最後のユートピア：歴史の中の人権』（2010）を手掛かりに、ソ連の人権擁護活動家で、プラハの春弾圧に抗議して赤の広場でデモを敢行したP・リトヴィノフを支援した英国の詩人、S・スペンダーの共産党歴に特に着目しつつ、転向 коммуニストがグローバルな人権規範・実践に新たな大義=ユートピアを見出していくプロセスを中心に考察したものである。

以上の4つの報告を踏まえたパネルディスカッション（司会：三隅一百副学府長）では、上野先生及び熊野氏から詳細で鋭いコメントをいただき、かつフロアからも数多くの質問や議論を寄せてもらった。それをここで紹介することはできないが、本シンポは予想以上の関心を集め、盛況であった印象である。私自身がシンポの運営と報告に気を取られて、会場の模様を写真に収めることを失念してしまったため、リアルな絵を示せないのが残念だが、70数席の会場がほぼ満席となり、新たな椅子の追加も行ったため、70人を超える出席者が得られたものと思われる。ネームバリューのある上野先生の登壇が大きかったのは間違いないが、昨年見られた多くのロシア革命100年のイベントとは趣向を異にする本シンポの企画に一定の関心が寄せられたのではないかと考える。

それに気をよくして、ポスト・ヒューマン時代を見据えた文理融合タイプの統合学際性を意識した研究プロジェクトが組めないかなどと、いささかユートピア的な妄想を膨らませているところである。

日本語教育・言語教育国際ワークショップ

「複言語・複文化環境における言語学習、言語教育」

松 永 典 子

(地球社会統合科学府)

【ワークショップの概要】

本ワークショップは、ヒダシ・ユディット教授（ブダペスト商科大学・ハンガリー）をお招きして2017年6月22日に開催された。本ワークショップは2部構成となっており、第1部は言語・メディア・コミュニケーションコース大学院特別講義、第2部は多文化関係学会九州地区研究会との共催により、一般公開の研究会形式にて実施された。共通するテーマは「複言語・複文化環境における言語学習、言語教育」である。

【講師の紹介】

まず、講師のヒダシ・ユディット教授について紹介しておきたい。ヒダシ教授は応用言語学博士で、異文化間コミュニケーション学において大学教授資格を有しておられ、日本語教育・言語学・異文化間コミュニケーション教育並びに研究の分野でこの30年間、活発な活動を行っておられる。略歴としては、1989年にハンガリー外国貿易大学（現ブダペスト商科大学）において東洋コミュニケーション研究所を設立し、1998年まで同機関の日本語プログラム主任を務められた。1998年から2001年にかけてはハンガリー教育省において二国間関係局副局長に任命されたほか、2001年から2006年まで神田外国語大学大学院教授、2006年から2012年までブダペスト商科大学国際経営学部長、2013年からはルーマニアのサビエンティア大学客員教授、2015年からは城西国際大学の客員教授も務めておられる。多文化関係学会では長年特任理事として活躍しておられる。

加えて、母語のハンガリー語に加えて、英語、ドイツ語、日本語、ロシア語に堪能で、レニングラード、日本、英国、イタリア、中国、台湾に長期滞在し、研究・調査・教育活動に従事してこられている。同時に、世界各地の大学で異文化間ビジネス、異文化間コミュニケーション、国際関係論の講義を行っておられ、まさに本ワークショップのテーマ「複言語・複文化環境における言語学習、言語教育」を体現してこられた方だと言える。

【本ワークショップのねらい】

多言語・多文化政策を掲げる欧州諸国はグローバル化に対す

る一つの答えとして、例えば英語などの一言語への集中ではなく、「母語プラス2外国語（言語）」主義のもと、「個人の複数外国語能力の育成」のための「複数外国語教育」政策を促進している。こうした複言語・複文化環境である欧州における言語政策、言語教育、言語学習の理念や方法論は日本における外国語教育、日本語教育にも様々に影響を与え、活用されてきている。また、このことにより、外国語教育、外国語学習が国や地域間、そして異文化間の相互理解促進の重要な場や手段とみなされていることが示唆される。

この点において、本ワークショップの実施により、言語・メディア・コミュニケーションコースの学生のみならず国際関係や政治学、社会学など幅広い分野の学生に対しても、言語・文化の学習が単に個人の知識やスキルの習得にとどまらないものであることを認識し、複眼的な視野・思考をもたらし効果が期待されると考え、本ワークショップを企画した。

【特別講義：日本語教育におけるパラダイム・シフト】

欧州では、人の移動とグローバル化が進む中で、外国語学習にも、言語運用力と並び異文化間の共存能力が求められている。さらに、職業生活では生涯にわたり外国語を学習する必要性が高くなるため、「外国語学習を自律的に進める能力」も必要になってきている。

日本語を学ぶ目的や手段、学習環境の変化

そういった背景から、欧州における日本語教育においても、文献学的な学問として行われてきた側面からバーチャルなものを含む形で誰もがアクセスできるものへと日本語を学ぶ目的や学習手段が大きく変化し、学習者層が幅広くなるといった大きなパラダイムの転換が起こっている。このため、教室環境も多様な学習者が存在する環境へと変化しており、教師の役割もかつての情報と知識の唯一の仲介者ではなく、情報を管理する、情報へのアクセスを仲介するモデレーターと変わっている現状が示された。

行動主義に基づいた欧州言語共通参照枠

また、欧州言語共通参照枠の特徴やそのメリットについても紹介された。たとえば、欧州共通参照枠は、言語を学ぶことによ

り何ができるようになるかという行動主義に基づいて策定されており、欧州域内ではどの言語でもどの教育機関でも通用する。そのため、域内の移動や大学受験、就職試験にも有利に働くということである。期待としては、高校卒業までに母語以外の2か国語が使えるようになるといった目標がたてられているという。

グローバル化の中で日本語能力は資産 (asset)

さらに、グローバル化する世界の中で英語は必須であるとしても、日本語を通じてのみできるようになる付加価値について触れられた。たとえば、他の言語を通じてよりも日本語を通じてのほうがテクノロジーや科学的成果により速くより簡単にアクセスできるという点で、日本語能力は「資産」であるといった日本語を通じて知識や視野を広げることのできるメリットについてもいくつかの具体的な知見が示された。

最後に、政治的・社会的な変化の激しいハンガリーの事例が日本語や日本との意外な共通点などをもとに紹介された。

【研究会：「複言語・複文化環境における言語学習、言語教育」】

第2部の研究会では、言語教育と文化の関係を中心に、文化が言語学習に与える影響とそれをふまえて、より良い言語教育のあり方及び外国語学習を通じて「できるようになること」等について議論を深めた。研究会には本学府生のほか、大阪・名古屋・岩手など遠方からの参加もあり、本テーマについての関心の高さがうかがえた。

言語と文化の関係という観点から：文化理解の重要性

講演では、まず、以下の3つの領域に関して教育における言語問題の重要性が高まりつつあることが指摘された。

- (1) 言語使用：グローバル化する世界における教育領域の中での言語使用、世界の言語問題、地域言語問題、異文化間学習という概念 (Jin-Cortazzi: Researching Intercultural Learning 2012)
- (2) 言語習得：学習スタイル、学習方法、学習実践における文化間の違い
- (3) 言語教育：言語教育への期待、その認識、教育方法における文化間の違い

また、可能な限り効率よく外国語を習得するには、文化を学習したり教育したりする際の違い (Hidasi: The Impact of Cultural-mental Programming on the Acquisition of the Japanese language 2007) への理解が必要で、これが無い場合に誤解、ミスコミュニケーション、最終的な教育目標を達成する上での困難につながることを示唆された。まさに、言語教育において文化を取り上げることは、グローバリゼーション、多言語主義、多文化主義の文脈において、言語学習のニーズが変化していることによりその妥当性が高まっているという。

九州大学大学院地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース 国際ワークショップ

Dr. HIDASI Judit Mária

(ユディット・ヒダシ教授)

ブタペスト商科大学・ハンガリー

複言語・複文化環境における
言語学習、言語教育



日時：2017年6月22日(木)

14:50～16:20：大学院特別講義

16:30～18:00：研究会

場所：伊都キャンパス比言文教育研究棟
4階第8セミナー室(419号室)

問い合わせ先：九州大学大学院比較社会文化研究院
松永典子 (mnori@isgs.kyushu-u.ac.jp)
共催：多文化関係学会、科研費課題番号 25511005

ワークショップ告知ポスター

言語習得における精神的プロセスの解明

また、多言語環境下における方法論の変更(コンテンツベースの言語教育、デジタル技術など)の必要性や、外国語の習得に関連する問題は国際化およびグローバル化の過程で重要性を増しつつある点が指摘された。最後に、神経学、心理学、社会学等、ほかの多くの専門領域の業績を結集し、言語習得における精神的プロセスをよりよく理解することにより、言語教育全体の効率性が向上することへの期待が述べられた。

【本ワークショップの意義：他領域との協働の必要性】

以上のように内容は多岐にわたるもので、すべてを紹介することはできないが、本ワークショップには、大きく以下2つの意義があったのではないかと考える。(1) 欧州における複言語・複文化環境の中で日本語学習・日本語教育がどのように変化してきたのかについて、欧州共通参照枠の成立と絡め、理解を深めることができた。(2) さらに、複言語・複文化環境における言語学習、言語教育のメリットと課題とはどのようなものなのか、欧州と日本との文化的関係性や相違点をもとに具体的に把握することができた。

最後に、言語習得の観点から学際的な研究の必要性とそれへの期待が示されたことは本学府の教育・研究にとっても重要な視点を提供してくれるものであったと考える。

アジア埋蔵文化財センターでの 学際融合研究の現在とこれから

仙 田 量 子

(アジア埋蔵文化財研究センター)

アジア埋蔵文化財研究センターは、九州大学の学内共同教育研究センターとして、大学の持つ学術的な価値のある埋蔵物を教育研究資源として活用すると共に、埋蔵文化財の発掘・調査・分析・活用等に関する文理融合の新たな研究体制を構築し、東アジアにおける埋蔵文化財の国際研究拠点を構築することを目的として設立された。学際融合研究として、発掘された遺物に対する地球科学的手法を用いた産地解析や、検出された遺構に対する地磁気年代測定などが行われている。ここでの地球科学的手法とは、従来、年代決定や履歴解析のために地質試料に対し行われていた元素の存在度分析、形態分析、同位体比分析などを指す。実際に、センターが考古資料に対して地球科学的な分析を行い、新しく明らかになった事例をいくつか紹介する。

一つは、北部九州地域の遺跡で見つかる、考古学の視点では福岡市西区「今山」産とされる玄武岩の石斧の一部が、石斧の構成鉱物・化学組成分析の結果から「今山」の玄武岩とは一致しないことが示されたものである。この結果は、北部九州に広く流通していた石斧の産地が1地点でないことを示し、また、ほとんどの石斧は考古学者の鑑定通り「今山」産であり、考古学者の観察眼の正確さを証明したと言える。今回得られた異なる産地の石斧の存在からは、新たな産地や流通経路の模索が必要となり、研究は新しい展開を迎えている。

分析結果から考古学研究者への提案がなされると言う学際融合研究ならではの事例も生まれている。例えば、北部九州の古墳から出土した須恵器の化学分析を行い、その産地窯を探索する研究である。分析した須恵器は大きく2群に分けられる。1つは既知の窯で生産された資料群、もう1つは手元にある既存窯の化学組成とは一致しない資料群である。後者の須恵器は、その化学組成からマグネシウムや鉄に富んだ岩石が原材料と推定された。この原材料は古墳周辺の粘土と組成が類似しており、また当時は粘土の産地と須恵器窯が遠く離れていたことは考えにくい。そこでセンターでは、産地不明須恵器を生産した未発見の窯跡が古墳の周辺に存在する可能性を提案した。この事例は未だ調査・発掘には至っていないものの、科学分析がツールとして利用されるだけでなく、新しい視点や考え方を提案できる可能性を示している。

その他にも、愛媛大学との共同研究において古代鉄の生産再現実験が行われている。再現実験は考古学的にも重要であると思われるが、科学分析の視点でも、原材料、得られた生成物、窯の周囲を試料として採取し、これらの分析結果を同等に比較できるという点で非常に重要である。試料中の化学組成や同位体組成の差異は、発掘された遺物同士の関係性や流通経路を探索の一助となるのはもちろん、土器の研究例のように考古研究に新たな視点を持ち込めるかもしれない。

このように華々しい成果を上げているアジア埋蔵文化財研究センターの学際融合研究に対し、部門活性化人材採用の私はどのような貢献が行えるのか。地質試料の様々な元素・同位体比分析データを用いた起源・履歴解析、年代決定などを行ってきた地球化学者としては、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター独自の地球科学的視点を加えることを提案したい。例えば、これまで化学組成と鉛同位体比という2次元解析を主とする青銅器や鉄器の原産地解析に、鉄・銅・炭素などの安定同位体比分析など多次元の視点を加える。元素は酸化状態の違いによる化学反応時における安定同位体比の変動が知られており、特に、天然で多くの酸化数を持つ銅は、青銅器や鉄器の原材料となる鉱石中で安定同位体比の変化が大きい。つまり、銅の安定同位体比の分析結果から原材料や産地の違いを明らかにできる可能性がある。とは言え、単一元素からの情報では、これまでと同様に原材料の移動やリサイクルの可能性は否定できず、複雑な情報は得られない。そのため、同一資料に対し、センターの持つ分析機器を活用して様々な分析を行い得られたデータから、多次元の視点を総合して議論を行う。

分析手法の増加はデータ採取までの時間と資料を多く消費する欠点もあるが、これまでより格段に解像度が高く精密な考察が可能となる事は明らかで、より多くの新しい知見が得られる。さらに、多様な専門性を持つ考古学の先生方と様々なデータを議論しそれを活用できるのは、九州大学ならではの大きな利点である。九州大学という考古学の一大拠点に、ここでしかできない分析、考古学視点と地球科学視点を合わせた分析データの解析から、新しい知見をもたらすことができれば、望外の喜びである。

中国・留学体験記

坂井 華海

(地球社会統合科学府)

(東アジア・日本研究コース)

私は、2016年9月から2017年7月まで、中国政府奨学金生として1年間、中国・上海市にある復旦大学に留学していました。留学は、学部4回生の時に「中国に留学してみたいなあ」と思って申請したところ「通ってしまった!」というのがきっかけです。今回は、私が中国で過ごした1年間で見聞してきたことを少し紹介したいと思います。



上海のシンボル・東方明珠塔と外灘の夜景

スマホがあれば生きていける

日本のコンビニや飲食店でも頻繁に見かける「支付宝 (Alipay)」の文字。テレビやネットのニュースでも話題になっている、中国最大ともいわれているオンライン決済サービスです。私が上海に到着して間もない頃には、現金決済とオンライン決済の両方ができた飲食店で、暫くして、現金が使えなくなったということがありました。オンライン決済が推奨されているのは、デパートやレストランなどの比較的大きな店舗だけでなく、個人経営の食堂や路上の屋台に至るまで、経営規模の大小は問いません。そして分野も、飲食や物品の購入、光熱費、交通カードのマナーチャージなど多岐にわたります。「スマホがあれば生きていける=財布はいらない」という生活が(少なくとも上海では)日常化しているといえます。たまに、地下鉄の切符を買う時に小銭を持ち合わせていないという中国の方にスマホ上でお金をやり取りして代わりに切符を購入したり、スマホの電池が亡くなった人に現金をもらって代わりに食べ物を購入したりする、ということもありました。もちろん上海は、居住者ではない外国人も多数存在する街でもあるので、100%キャッシュレスではありませんが、

生活する上では、日本とは比べものにならないくらいの「キャッシュレス社会」です。

街中が自転車だらけ

新学期が始まって間もなくから、学校や街中で「シェア自転車」を見かけるようになり、気づいた時には(少なくとも)10種類の自転車で道端が埋め尽くされているという、日本では、きっとお目にかかれないであろう風景が当たり前になっていました。利用料金は、日本のレンタルサイクルに比べると随分と安価で、「どこでも乗れる(降りられる)」というのも生活する上ではとても便利で魅力的です。もちろん、「シェア自転車」ビジネスの波が一気に押し寄せたことに起因する課題や社会問題もあります。それでも、日本では「駐輪場は…」「支払い方法は…」などの懸念事項が次から次へと挙げられ、なかなか新しいシステムを普及させることが難しい雰囲気であることを考えると、中国の実践と普及のスピード感には見習う点も多いのではないかと思います。

中国の国酒・茅台酒の故郷

中国内陸にある貴州省・遵義市の茅台は、その名の付いた茅台酒の産地として有名な町です。どういう町なのか、一言で表すなら「お酒の街」です。車で町へ向かっているときから(町へ近づくと)“茅台酒の匂い”がしましたし、茅台酒の生産がその土地の経済や人々の暮らしを支えていることが、一見すればわかるといっても過言ではありません。



茅台酒でいっぱいの倉庫

○ ○ ○ 海外レポート



見上げるのは、巨大茅台酒のオブジェ

ご縁あって、その会社見学をすることができました。茅台酒の味は、地域や顧客のニーズに応じて調整しているそうで、その調整で使用されている熟成度合いの異なるお酒を試飲した時には、その味や風味のちがいに驚きました。また、出勤後の朝礼で整列してリーダーの話聞く姿や士気を高めるために皆で歌を歌っている姿を見たり、働く人たちの話を聞いたりして、“大学入学”や“学歴”が所謂「成功」の要素として語られることが多い中国社会の別の面を知ることができた気がしました。

40時間列車を乗り継ぐ

中国国内を移動するのに便利なのが列車です。時間はあるけどお金がない学生にとっては重宝する交通機関です。「まさかこんなところに人が…!」や、たまたま居合わせた全く分からない方言を話す中国の方とコミュニケーションを試みる等の(好奇心旺盛な人間にとっては) 愉快的体験ができます。



初めて見た万里の長城は西の端、甘粛省

夏に新疆ウイグル自治区へ出かけた時も列車を利用しました。切符の都合上、深夜に乗り換えたり、椅子の席に長時間座ったりして移動しました。新疆ウイグル自治区には、私たちがニュースなどからイメージできる「中国」とは異なる景色・生活文化があります。聞こえてくる言葉は普通語(中国語)よりもウイグル語の方が多く、住居や服装も特色があり、中国の広大さと多様性を改めて実感できる場所です。

新疆では、中国の他の地域よりも安全検査がいたるところで実施されていて、かつ厳格です。駅や高速道路の各所に設けられている検査場だけでなく、公共トイレやスーパー、飲食店等の入り口でも安全検査がありました。興味深いことは、(私が見てきた限り)外国人である私よりは中国人に対して、もっと言うならば、ウイグル族などの少数民族の人たちに対して、検査は厳格に適応されていたことです。こうした状況と、新疆の各地を旅しているときに会った色んな立場の人の話——度々「国語」話せる?と聞かれた——をあわせて考えてみると、その土地で暮らす全て人が直面している様々な、そして複雑な問題を想像することができました。



朝ではなく、夜の8時20分、トルファン

“お隣は中国”

留学中は大学の寮で暮らしていました。4人暮らしで、1年間ずっとルームメイトだったカザフスタンの友人とは、同じ学年ということもあって、色々な話をしました。友人は、手料理を振舞ってくれたり、カザフスタンの気候や町の様子を紹介してくれたり、ロシア語とカザフ語が公用語だからと、いくらか言葉を教えてくれたりもしました。自分たちの国と中国のかかわりについても話すことがあって、例えば、(文脈は異なるものの)中国「元」の時

代の歴史は、遠く離れた日本とカザフスタンに共通する話題であることに驚きました。カザフスタンもまた、中国の“お隣”で、陸続きであることを考慮すれば、日本のよりも“お隣は中国”なのです。新疆ウイグル自治区に出かけて以来、(口語だけ)ウイグル語を少し勉強しているのですが、ウイグル語とカザフ語には(文字は全く違いますが)発音がよく似ている単語があります。

冷静に世界地図を思い浮かべればその「近さ」は明らかなのに、自分の研究対象は「東アジア」「日本、中国」と思い込んでいたために、知らず知らずのうちに“世界”、“視野”が狭くなっていました。留学は「ただいるだけ」では何にもならないかもしれませんが、外国には「ただいるだけ」で毎日毎時間、色んなことに気づかされます。

めぐり巡って…

冒頭にも記したように、私の「中国留学」は突然発生したものでした。しかし、留学が決まって、大学院に入学して、その後すぐに発生した熊本地震によって、何となく「自分には何ができるだろうか(できない…)?)と日々ぼーっと過ごしていた私にとっては、とても有意義な期間になりました。



Kuma Caféオープン、人山人海、上海・新天地

「留学の意味は?」「1年間の成果は?」とよく聞かれるのですが、今の私には「(分から)ない」としか答えられません。でも一つ、自分自身が手ごたえを感じていることを挙げるとすれば、「やってみたい」、「やる」、「やった」が少しずつ積みあがるようになったことです。留学生が誰もいないような集まりに顔を出してみたり、自分の語学能力を超えて中国のテレビ番組収録に出てみたり、一人で中国の内陸地域に出かけてみたり…。留学中に「日本にいる心配性・ネガティブな私なら絶対にしない」ことをやってみて、よく分からないことにも朗らかに飛び込んでみる度胸を獲得できた気がします。



くまラボの任命式、熊本県庁

私は、帰国後間もなくフューチャーアジアのプログラム生として、熊本県が募集をした「くまラボ」に——募集要項の「民間企業及び大学などに所属する職員、研究者等」の「等」に期待を込めて熊本県庁に電話をして——応募しました。任命式の日、「やはり学生が来る場所じゃないかも」、「なんで応募したのだろう」、「修士論文は…」と自分の浅はかさを考え込みました。それでも、自分で定めた「くまモンがつなぐ熊本と中国—留学生の声、ネットワークを活かしたインバウンドの可能性」のテーマのもと——社会調査の勉強をしてみたり、企業の人と話してみたり、中国の友人たちの意見を聞きながらプロジェクトを立ち上げたり——自分にできる範囲で熊本とのかかわりを築けたことについては、今の自分も(去年の自分も)納得できる留学での“変化”です。たった1年間の留学で見聞してきたことには限りがありますが、中国で出会った多くの人との“つながり”は私にとってかけがえのない財産です。自分が思い描く「熊本と中国をつなぐ」を色んな人と協力しながら少しでも目に見えるカタチにしたいと思います。

入学した日「留学するから休学する」と伝えた時、帰国後迷走している時、指導教員の先生は「留学はきっと人生において意味がある」と話してくださいました。何かに夢中になっている時や悩んでいる時に、全体像が見えなくなる傾向にある私には、まだ先生が仰っている言葉がピンときません。ただ、修士課程を修了する時に、修士論文はもちろん、中国に留学したことや「くまラボ」に応募したこと、自分が選択したすべてのことに、後悔はなかったと言えるよう、これからも周りの人に感謝しながら努力していきたいと思います。

Experience at the Annual Meeting of Taiwan Entomological Society in 2017

黄 悠 然

(地球社会統合科学府)

(地球社会統合科学専攻)

At the annual meeting of Taiwan Entomological Society in 2017, I won the championship of the students' contest of oral presentation (in the group of systematics, population genetics and evolution). The contest was for all students from undergraduate to Ph.D. students to give a 10 to 12 minutes presentation about their research.

My topic was "Taxonomic study of *Medinodexia* Townsend, 1927 (Diptera: Tachinidae)". *Medinodexia* is a small genus comprising 4 species, which are mainly distributed in the Oriental region. *Medinodexia fulviventris* Townsend, is the type species of this genus distributed in Indonesia. *Medinodexia morgani* Hardy, had been used as a biological control agent against *Aulacophora hilaris* Boisduval, (Coleoptera: Chrysomelidae) in Australia, and was also found in Sri Lanka. *Medinodexia exigua* Shima, and *Medinodexia orientalis* Shima, were classified into *Medinodexia* because of the piercing ovipositor borne by female flies.

In 2017, there was an undescribed species found in Ito campus, Kyushu University. The male postabdomen of this species is similar to that of *M. fulviventris*, and the host of this undescribed species is *Aulacophora nigripennis* Motschulsky, (the same genus as the host of *M. morgani*), so it should be *Medinodexia*. By contrast, *M. exigua* and *M. orientalis* are unlikely to be *Medinodexia*. The male postabdomen of these species are distinctly different from other species in this genus. Though the features of female postabdomen were the reason why they have been thought to be *Medinodexia*, I dissect the specimens of these species and found that the "ovipositor" of them are actually different from others. Seventh tergite and 7th sternite are fused on *M. fulviventris* and undescribed species, while they are separate on *M. exigua* and *M. orientalis*. Moreover, the shape of 6th tergite is special in "real" *Medinodexia*, which is narrow with a V-shape under the membrane, as that part of those species is nearly rectangle.

The 6th and 7th segment of the abdomen could also shed light on the relationships of genera. The genus *Medina* has 6th tergite (which similar to those of *Medinodexia*) and fusing 7th segment, and these characters are also found in other *Medina*-genera group. As a result, *M. exigua* and *M. orientalis* should not be closely related to *Medina* or *Medinodexia*. In the future work, I would like to analysis the taxonomic placement of *M. exigua* and *M. orientalis* by molecular evidence.

Winning this contest means a lot to me. I had lost my confidence in being a researcher because that I thought I was not qualified to be in graduate school with many brilliant students and Professors. I was running away from my study since I am ashamed of myself and too afraid of making any tiny failure. After struggling with self-hatred and pretending to be fine for a long time, I was tired and thinking about giving up. However, it turns out that I am not that bad. Though I am not an excellent student, I could try to be it over and over again. I have to accept what I am and live as what I am. As a result, I decided to ignore my high standers and try to make little progress every day.

In the end, I have to thanks for the financial support from the Academic Conference Presentation Support Program for Graduate Students of Integrated Sciences for Global Society.



「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」 世界自然遺産登録を目指して： IUCN調査団やんばる視察同行紀

荒谷 邦雄

(地球社会統合科学府)

熱帯域である「東洋区」と温帯域である「旧北区」という世界的な大きな2つの生物（動物）地理区の境界に位置し、両者の要素が混じり合った豊かな生態系を有する琉球列島は、平成25年1月に「奄美・琉球」として、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界自然遺産暫定リストへ記載された。その後、具体的な候補区の絞り込みを経て、平成29年2月1日には「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録の正式な推薦書がユネスコに提出された。

これを受け、平成29年10月11～20日の日程で、世界自然遺産登録の可否を勧告するユネスコの世界遺産委員会の諮問機関である国際自然保護連合（IUCN）の調査官による現地視察が実施された。このうち、10月15～17日に実施された沖縄島北部（通称「やんばる」：国頭村、東村、大宜味村から成る）の現地視察に専門家として同行する機会を得たので、その際の様子を報告したい。

1日目

「まさかこのタイミングで・・・」ニュースを聞いた時、思わずそう呟かすにはいられなかった。調査官が来日した10月11日の午後、沖縄島北部の世界遺産推薦地に近接する東村高江に在沖米海兵隊所属の大型輸送ヘリコプターが不時着炎上するという予期せぬ事故が発生した。沖縄県内外の自然保護団体などから米軍北部訓練場の存在はやんばるの世界遺産登録における最大の懸案事項と指摘され続けていただけに、今回の事故が調査官の評価に与える影響はもちろん、事故に触発された関係団体の活動の活発化によって視察の円滑な実施が妨げられる可能性も懸念された。

15日午後、奄美大島から視察団が到着。高まる緊張感の中、いよいよ沖縄島での視察が始まった。

視察団はIUCNから派遣されたバスチャン・ベルツキー（Bastian BERTZKY）氏（IUCN世界遺産科学アドバイザー／欧州委員会共同研究センター研究員）とスコット・パーキン

（Scott PERKIN）氏（IUCNアジア地域事務所アジア資源グループ長）の2名の調査官を中心に組織されていた。

那覇空港到着ロビーでの歓迎イベントの中止や北部への移動ルートの変更など、万一の不測の事態に備えた対応をとったこともあり、幸い大きな混乱もなく、調査団は同日夜、予定通り国頭村のホテルに到着した。

慌ただしい夕食の後、最初の視察プログラムとして希少種の密猟を防ぐために国頭村の森林組合が中心になって長年実施している夜間の林道パトロールに同行した。道中では樹上で寝ているヤンバルクイナや夜行性のリュウキュウコノハズクなどが観察できた。スコットさんは実は年季の入った鳥屋さん（愛鳥家）であつたらしく大喜びだった。一方、若いバスチャンさんは我々が捕獲したハブを触って大興奮した様子だった。

林道パトロールの後は懐中電灯を頼りにやんばる北部の西銘岳山麓を流れる座津武（ぞつん）川の沢登りをしながら、夜行性の両棲類や爬虫類を観察した。ハナサキガエルやオキナワイシカワガエル、シリケンイモリ、ガラスヒバアなどのほか、希少種クロイワトケゲモドキの愛嬌のある姿も見ることができた。バスチャンさんは夜のやんばる探検がいたく気に入ったようで、巨大なオキナワオオハシリグモやオオゲジ、ヤンバルクロギリスなどマニアックなゲテモノ？を私が見つける度に目を輝かせていた。



どこか愛嬌のあるクロイワトケゲモドキ

○ ○ ○ 国内レポート

2日目

明るく16日の朝は環境省やんばる野生生物保護センターでやんばるの生物多様性やその遺産価値に関するレクチャーが実施された。レクチャーの冒頭には環境省や沖縄県が中心になって2000年から取り組んできた沖縄島における外来種のマングース防除事業に関する報告があった。マングースは1910年にハブや野ネズミの駆除のために那覇市近郊で放たれたわずか十数頭の個体が繁殖し1990年にはやんばるにまで分布を拡大、その後も北上を続け、ヤンバルクイナを始めとするやんばるの希少な動物に甚大な被害を与えた。マングース防除事業ではやんばる南端部に総延長6.8kmのマングース北上防止柵を建設する一方で、柵の北側からマングースを完全排除するために、マングースバスターズ（マングース捕獲専門チーム）を結成し、やんばるの山中への30,000地点以上の捕獲罠や自動カメラの設置、マングース探索犬の導入など組織的かつ日々の努力を続けた。その結果、ピーク時には30,000頭以上と推定されたマングースの個体数は減少し、現在ではCPUE（1,000個の罠での1日当たりの捕獲頭数）は限りなく0に近づくまでに至った。マングースの個体数の減少と生息域の縮小に伴って、ヤンバルクイナの生息個体数の増加とやんばる南部での復活が観察されているという。こうした努力は調査官にも非常に高い評価を受けていた。

レクチャーの後半では、私も日本最大の甲虫として有名なヤンバルテナゴコガネやオキナワマルバネクワガタなどの樹洞性大型甲虫類に関して、その希少性や固有性、遺伝的特性などについて、実物の標本を見せながらこれまでの研究成果を紹介した。



バスチャンさん(左)とスコットさん(右)に説明する著者

レクチャー後は、やんばるの森を一望できる長尾橋からの世界自然遺産推薦地とバッファゾーン（遺産保護のために周囲に設ける緩衝地帯）の概要説明、希少種の交通事故対策現場や環境省のヤンバルクイナ飼育・繁殖施設（通常は非公開）、国

頭村のヤンバルクイナ生態展示学習施設の見学とまさに分刻みのスケジュールの連続だった。



ヤンバルテナゴコガネの生息木視察の様子

昼食後は、ヤンバルテナゴコガネの生息木を見学に出かけた。マングースの捕獲罠を設置／回収するために山中につけられた踏み跡を分け入ること約40分、アップ・ダウンを繰り返し、ようやく世界自然遺産推薦区域内に位置する昼なお薄暗い林内に佇む巨大なイタジイの生息木にたどり着いた。蔭が絡む苔むした幹や枝にはシダやランの希少種が多数着生し、上部の樹洞の開口部からは複数の樹種の苗木が伸びている。1本の樹でありながら、さながら「やんばるの森林生態系のミニチュア版」とも言える様相を呈したこの巨木を見て、調査官のお二人も感慨深げだった。この生息木の周辺では大変幸運なことにオキナワマルバネクワガタの雌雄成虫も観察できた。



林床を歩行するオキナワマルバネクワガタの雄成虫

2日目の現場視察も大詰め、この後は世界遺産登録への最大の懸念事項と指摘されていた北部訓練場に関わる現場説明を残すのみとなった。調査官のお二人を平成28年12月に返還された米軍北部訓練場跡地を俯瞰できる眺望地点に案内する。今回

の視察の最大の山場を迎え、誰もが緊張を隠せない中、環境省と林野庁の関係者が地図を片手に返還地の範囲を指し示しながら説明を開始した。返還跡地について「やんばる国立公園」や「森林生態系保護地域」に編入する準備を進めていることなど今後の方針を説明した直後のこと、スコットさんから数日前の高江のヘリコプター事故の世界自然遺産推薦区域への影響の有無に関する質問が飛んだ。思わず皆が顔を合わせた。しかし、事故現場の具体的な位置を地図上に示し事故の状況を説明した上で、世界自然遺産推薦区域や緩衝地帯はもちろん事故現場周辺に生息する希少種への影響もなかったことを伝えるとスコットさんも納得されたようだった。皆が安堵の胸をなでおろした。一方で、視察期間中、行く先々で世界自然遺産への推薦を契機に沖縄の米軍基地問題の早期解決を図ろうと訴える多数の人々と出会った。幸い事前に懸念していたような混乱はなかったが、米軍基地を抱える沖縄独自の複雑な事情があることは忘れてはならないと感じた。

夕方からは地元3村の行政、学校、農林水産業、観光業、自然保護団体、住民代表など様々なステークホルダー（利害関係者）を一堂に会した意見交換会が開催された。世界自然遺産登録に向けて地元関係者がどのような取り組みをしているかが順に紹介され、地元の気運も高まっている印象を受けた。しかし一方で、林業関係者から緩衝地帯での択伐を認めてほしいという要望が出されるなど、環境保全と住民生活との共存を図っていくための仕組み作りが必要であることが浮き彫りになった。また、自然保護団体からは、マングース防除は一応の成果が上がったものの、新たな外来種としてノネコやノイヌへの対策が急務であるとの指摘もあった。さらに、観光業界からは利用者の増加に伴う自然環境の適切利用と管理に関する不安が寄せられた。多くの課題に対して、引き続き関係機関が連携し、対策強化を図る必要性を強く感じた意見交換会だった。



ステークホルダー会議の様子

意見交換会の後は国頭、東、大宜味3村の村長も参加してのお待ちかねの歓迎会に突入した。艶やかな琉舞（琉球舞踊）を鑑賞しながら、やんばるの山と川、海の幸に舌鼓を打ち、ずらりと並ぶ地元の泡盛の古酒が入った瓶を順に味わっていく。いつの間にか三線と太鼓の音色に合わせてバスチャンさんもスコットさんも踊り始めている。賑やかな宴会は深夜まで続いた。

3日目

昨晚の宴会の余韻が残っているのか、皆、朝の出足が遅い。そんな中、スコットさんだけは早朝から野鳥観察に出かけたらしい。さすが筋金入りの鳥屋さんだ。

最終日は那覇空港に向かう途中でマングース北上防止柵を見学する予定だったが、私は別用務があったため、一足早くレンタカーで空港へ向かうことにした。別れ際にバスチャンさんとスコットさんからは、今回の専門家の説明や案内は極めてクオリティが高く、この地域の重要性と価値を十分に理解できたとの感想を頂いた。視察団はこの後、石垣島を経て最後の推薦地である西表島に移動する。強行日程で調査官のお二人に疲れが出ないことを祈りながらやんばるを後にした。

今後の展開と課題

今後は今回の視察結果の報告・審議を経て、今年5月頃のIUCN評価書の発出、6～7月頃の世界遺産委員会での審議・登録可否決定というプロセスが続く。無事に世界自然遺産に登録されることを願うことは言うまでもないが、世界自然遺産への登録はゴールではなくスタートであるべきだと思う。琉球列島の価値は、代表となった4島の推薦地だけではなく、周辺の島嶼・周辺地域にもあることも忘れてはならない。琉球列島の貴重な生態系・生物多様性を将来に引き継いでいくために、我々にも重い十字架を背負う覚悟が必要である。

日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究

岡田 美穂

(北九州市立大学他非常勤講師)

論文の執筆を始める前

私はおよそ17年間、福岡県内の複数の大学で非常勤講師として働いてきた。担当科目は主に外国人学部生を対象とした日本語の科目である。2010年10月に九州大学大学院比較社会文化学府の博士課程に在籍させていただき、2016年9月に学位を授与した。博士論文の題目は「中級レベルの日本語学習者における場所を表す格助詞『に』の習得に関する研究—中国語を母語とする学習者を対象として—」である。

私が過去に働いていた日本語教育の現場では日本語学習者に誤用が現れた場合、多くの日本語教師はその使い方が日本語学習者に「入っていない」という言い方をした。助詞についても同様である。例えば場所を表す「に」を用いるべき個所に用いられた「で」の誤用が現れた場合である。それは日本語能力が初級レベルの日本語学習者の誤用であっても中上級レベルの日本語学習者の誤用であっても同じであった。

私は日本語の学習を始めて間もない初級レベルの日本語学習者の「に」を「で」とする誤用と、日本人学生と同じ講義を受けている中上級レベルの日本語学習者の「に」を「で」とする誤用が現象的には同じであっても質的にも同じであるとは思えなかった。現象的には同じ誤用であっても質的な違いがあることを明らかにすることができれば、日本語学習者の習得が進んでいることを示す指標または目安になるのではないかと考えた。

そして、日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得がどのように進んでいくのかという発達段階の1つ1つの段階を明らかにしたいと思い、研究を始めた。発達段階とはある1つの項目の習得において学習者が辿る習得の道筋のことで、学習者の母語からの転移が習得の途上に出現することも分かっているが、学習者の母語や学習の方法などが異なっても、同じ言語を学習する学習者間に共通した発達段階が存在することも分かっている(白畑・若林・村野2010)。

論文の一部

日本語学習者は日本語の学習が始まって早い段階で存在場所を表す格助詞「に」と動作場所を表す格助詞「で」を学習した

後、両者を混同することが知られている。存在場所を表す格助詞「に」とは、例えば「あそこに佐藤さんがいます」のように存在文における存在場所を表す名詞に後接される「に」である(=存在場所「に」)。そして、動作場所を表す格助詞「で」とは、「私は駅で新聞を買います」のように動詞が表す行為・動作が生起する場所を表す名詞に後接される「で」のことである(=動作場所「で」)。

以下の(1)、(2)は、日本語能力が初級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の誤用である。

- (1) *家でいる。
- (2) *食堂にうどんを食べた。

存在場所「に」と動作場所「で」の混同による誤用は、日本語能力が初級レベルの母語の異なるさまざまな日本語学習者に現れることが知られている。このことから日本語学習者の存在場所「に」の発達段階は、まず動作場所「で」との混同による誤用が現れる段階があると言える。

では、次にはどのような段階があるのか。しかし、次の段階はまだ明らかにされていない。次の段階がどのような段階かを明らかにするためには、日本語能力が中級レベルの日本語学習者を対象として存在場所「に」の使用状況を調べなければならない。

次の(3)、(4)は日本語能力が中級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の誤用である。

- (3) *クラスで2人韓国人がいる。
- (4) *あの喫茶店にコーヒーを飲もう。

中級レベルの学習者によるこの(3)、(4)の誤用は、初級レベルのときに現れる(1)、(2)の誤用と現象的には同じもののように見える。しかし、そのような見方が正しいとすれば日本語学習者の存在場所を表す「に」と「で」の習得は中級レベルになっても進んでいないことになる。現象的に同じように見える(1)と

(3) の「に」→「で」の誤用、(2) と (4) の「で」→「に」の誤用は質的に同じものなのか。

(3)、(5)、(6) は筆者が担当した留学生を対象とした日本語の作文の授業の中で中国語を母語とする一人の日本語学習者が同じ時期に書いた文である。

- (3) *クラスで2人韓国人がいる。
- (5) ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ。
- (6) ホームヘルパーは家にいたら、子供たちもとても安心だ。

(3) と (6) は人の存在を表していると思われる。(3) は「に」→「で」の誤用であるが、(6) では「ホームヘルパー」が存在する場所「家」に存在場所を示す「に」が正しく後接されている。一方、(5) では「老人の家で世話をする」のように「世話をする」という行為が行われる場所「家」に「で」が正しく後接されている。これらの例から、当該学習者は存在場所には「に」を、動作行為の場所には「で」を用いることは一応理解していると見られる。

(3) が (1) と異なるのは次の点である。(1) の「家」は物理的な場所を表しているのに対し、(3) の「クラス」は当該学習者にとって単なる場所ではなく「人の集合」と解釈された可能性があるのである。(3) を用いた日本語学習者は、範囲限定を表す「で」を理解しているが完全に理解していないため、「クラスで誰が一番スペイン語が上手ですか」のような範囲限定を表す文と類似の概念を持つ存在文を混同し (3) の「に」→「で」を用いたのだと考えた。

上記のことを明らかにするために「に・を・で・から」の選択肢から最も適当なものを選ぶという「食堂() 彼がいる」のような問題文から成る調査票を作成し、日本語学習者に調査協力を得て、データを重回帰分析した。

このようにして、一見初級レベルの誤用と同じに見える中級レベルの誤用を分析し、中級レベルの日本語学習者に現れる誤用が初級レベルの日本語学習者に現れる誤用とは質的に異なる誤用であることを示した。それによって、場所を表す格助詞「に」の発達の1つの段階の可能性を示すことができたと思っている。

現在の取り組み

思い出してみると最も苦労したのは、日本語学の格助詞についての先行研究をまとめ、既に立てている1つ1つの仮説にどう結びつけるかという作業であった。その際、指導教員の先生方に本当に助けられた。

現在も残っている最も大きな課題は、動作場所「で」から派生

した存在感の薄い範囲限定「で」が場所を表す格助詞「に」、さらには、場所を表す格助詞「を」の習得にどの程度関わっているのかを明らかにすることである。これも指導教員の先生方のご助言によって私自身の課題にすることができた。

私は現在も研究を続けている。現在取り組んでいるのは、存在場所「に」の習得において、範囲限定「で」との混同による誤用が、初級レベルの中でもどのような日本語レベルの日本語学習者に現れ始め、中級レベルのどのような日本語レベルに至ると消えていくのかについてである。

また、「部屋にテレビを置いたので狭くなった」のようなモノの移動先を表す「に」の個所に用いられる「で」の誤用と動作場所「で」及び範囲限定「で」との関係を明らかにすること、そして、この誤用が中級レベルの中でもどのような日本語レベルの日本語学習者に現れ、どのような日本語レベルに至ると消えていくのかについても取り組んでいる。

仮説を検証するための調査票を作成し、調査を実施し、データを分析する過程は楽しい。もちろん仮説を支持する分析結果が得られなければ、仮説を立て直し、調査票を作り直し、全てやり直しである。一連の作業には約1年かかる。そのため、場所を表す格助詞「に」の発達段階の全容を明らかにするにはまだまだ時間がかかりそうである。欲を言えば大学に所属し研究したいと思っているが採用は難しい。しかし無所属であっても研究を続けることができるのは有り難い。

指導教員の先生方のおかげで私は今も続けて研究できることを心より感謝している。



同じゼミの藤山智子さんが撮ってくれた私の研究発表の写真

参考文献

白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010). 『詳説第二言語習得研究－理論から研究法まで－』 研究社

博士論文を書き終えて

新井克之

(西日本アカデミー航空専門学校・国際コミュニケーション学科)

私が母校、九州大学大学院の比較社会文化学府（以下、比文）に入学したのは2011年のこと、今になって振りかえってみれば、博士論文が完成する2017年までの道のりは長かったようで、それだけに充実した時間でした。比文へ入学する以前は、中米にあるグアテマラという国で青年海外協力隊隊員として日本語を教えました。とはいえ、彼の地、中米グアテマラで日本語を学ぶ学生は、たとえ日本語を学習しても、日本企業への就職や日本への進学の見込みも皆無で、さらにいえば日本人と話す機会もほとんどありません。つまり日本語はあまり実用的なものではありません。でも当の日本語学習者はアニメーションに代表される日本のサブカルチャーがただ単に好きだというわけではないようです。5年6年と熱心に日本語学習する学生と接する度に、どうして、彼らは日本語をこんなに熱心に学習するのだろうか？何のために私は日本語を教えているんだろう？と考えはじめるようになりました。そして同時にまた、職場であった中南米の大学のなんともおおらかで自由な雰囲気が大好きになり、また大学で学びたいなあという気持ちを抑えきれずに、日本へ帰国後は、晴れて九州大学の院生として九州に生活の拠点を移しました。

東アジア特有の豊かな自然に囲まれた伊都キャンパスでは、集中して研究活動する機会に恵まれました。そうして、修士論文では、「実用性」がない日本語学習の意味について考察しました。しかし、その時点ではまだまだ自分の研究の未熟さを痛感するばかりで、そのため博士課程に進学することとなりました。さらに自分の研究を掘り下げていくにつれて、これまで学んできた言語学や教育学分野の学問領域だけでは、事象を捉えきれないことが分かります。そこで学際的な比文らしさが存分に活かされ、幸運にも社会科学分野の先生方に指導していただくことになり、社会学等の理論を学ぶ機会にも恵まれ、時間の許す限り学問領域に囚われない自由な研究世界に没頭することができました。

また2014年から2015年にかけて、メキシコ国立自治大学の応用言語学課程の大学院に留学する機会にも恵まれました。留学当初は、ゼミでの聞き取りに難儀しましたが、次第にディスカッションに参加できるようになり、その後メキシコで2度の学会発表を行いました。そうしてスペイン語のトレーニングを積んで、いよいよ調査対象地のグアテマラへ。最終的には約一ヶ月ほどの現地調査を計3回実施しました。おかげさまで沢山のインタビューデータを得ることができました。

しかし、帰国してからその膨大なデータの文字起こしと翻訳作業には、気の遠くなるような時間と忍耐力が必要となり、結局、博士論文完成まで当初の予定を1年間オーバーしたうえに、論文のボリュームも付録も含めると700頁を超える大著となりました。

さすがに苦労ただけあって何とか完成したときの喜びは言葉では言い表せません。ただひとつ言えることは、博士論文を書くという経験は私の人生にとって、かけがえのない大きな財産となっているということです。

私は博士論文執筆という経験を通して、研究とは、人や社会を知るためのひとつのプロセスだと認識するようになりました。このことを言い換えれば、私にとって研究とは、まるで旅行や探検のように新しいことを知り、まだ明らかにされていないことを発見する作業、それはとてつもなく楽しく、愉快で今ではライフワークとしてこの先もずっとつづけたいと願っています。それもこれも比文との出会いがあったからこそです。

博士論文を最後まで執筆できたのはひとえに比文の先生や多くの方々のおかげです。35才で大学院の修士課程への入学という、研究者としては遅いスタート、そんな不安を修士課程では松永先生に励ましていただきました。また博士課程では、社会科学の視点で阿部先生に公私にわたって熱心に指導していただく機会に恵まれました。また、井上先生にも多くの言語学分野の資料を借り、相談に乗って頂きました。スペイン語の翻訳では山村先生に多く助けて頂きました。そして定期的なディスカッションによって博論完成までの指導をしてくださった溝口先生には感謝の念しか思いつきません。他にもここでは書き切れないほどの比文、メキシコ、グアテマラで出会った方々にお世話になりっぱなしでした。皆様本当にありがとうございました！



グアテマラ・国立サンカルロス大学にて調査協力者と筆者

博士論文を書き終えて

吉 澤 聡 史

(比較社会文化学府)

(日本社会文化専攻)

私は2011年4月に比較社会文化学府の修士課程に入学した。その後6年が経過し、先生をはじめとする多くの方々の支えにより、2017年3月24日付で博士の学位を授与されることができた。私が比較社会文化学府に所属することになったきっかけと学位を取得するまでのことを振り返りたいと考えている。

双翅目昆虫の研究を始めた理由

私は幼少から昆虫類の多様性などに興味を持ち、昆虫学を学ぶため、学部生の時に東京農業大学の昆虫学研究室に在籍した。ここは、様々な昆虫の研究者が在籍しており、過去に鞘翅目や半翅目などの昆虫類の世界的な権威を輩出した研究室である。私が在籍していた当時には、昆虫で最も種数が多い5大目のうち、鞘翅目、半翅目、鱗翅目、膜翅目の研究が盛んであったが、双翅目昆虫類の研究者はいなかった。双翅目昆虫はカ、アブ、ハエと称される昆虫によって構成されるグループであり、マラリアなどの重要な疫病の媒介をするものや農作物に壊滅的な被害をもたらすものが知られ、応用昆虫学的に極めて重要な分類群の一つである。現在の日本における双翅目昆虫の研究者の数は減少傾向にあり、衛生動物学分野などでも双翅目昆虫の研究者の需要は高まっている。

私は元々、クワガタムシやチョウなどの派手な虫が好きであったが、これらの分類群は研究している人が多く、私がこれらの分類群の研究をしたところで、他の研究者よりも優れた研究成果を出すことは難しいだろうと考えていた。また、私の実家が山中にあり、私が双翅目昆虫と関わる機会が多かったことと、農学部に所属していた影響から、研究する虫は双翅目昆虫、あるいはクワガタムシと同じ鞘翅目に属し、農業上重要なグループであるゾウムシのどちらかにしようと考えていた。当時私が所属していた研究室には、ゾウムシの世界的な権威の先生がおられたため、ゾウムシの研究をすれば直接指導を受けられると考えていたが、ある先輩から「ゾウムシも面白いが、研究者の数が多く、他の研究者との競争などが厳しいため、別の意味で大変だろうけれど、双翅目昆虫が研究対象としては良いと思う。」と言われ、双翅目昆虫を研究対象として調査研究を開始した。

比較社会文化学府に入学することとなった転機

学部生の時に、独りで双翅目昆虫の研究を行っていた私は当時、分類学に興味を持ちながらもある理由により、卒業論文題目として環境省レッドデータブック掲載種であり、両生類に寄生すると噂されるクロバエ科の一種の生態学的研究を行っていた(幸い、この時の研究成果が比較社会文化学府に入学した後、学術論文化された)。この頃は学術論文を読むことにも慣れ、双翅目昆虫の採集、種を調べることは指導されるまでもなくやっていたが、双翅目昆虫を研究し、今後どのような展開に広がっていくか悩んでいた時期であった。この時期は大学院に進学し、双翅目昆虫の研究遂行能力を高めたいが、どこに行くべきか迷い、途方に暮れていた。そのようなときに、ヤドリバエ科の分類学者である館先生(後の私の指導教員)が比較社会文化学府の教員になられた。そして、私は双翅目の分類学的な研究遂行能力を身に着けるため、比較社会文化学府に入学を志望することにした。入学試験の問題は英語と生物学であり、自身の学力に自信がなかったので、入学できるのか不安だったが、無事に試験に合格することができた。

比較社会文化学府への入学と新しい研究テーマ

比較社会文化学府に入学することとなった私は2011年4月に福岡へ引っ越し、新しい生活と新しい研究を始めることとなった。学部生の時に研究していたクロバエ科をそのまま研究対象とすることも考えていたが、将来的に昆虫学者の主要な就職先である農業試験場などに就職する可能性も考慮し、農学に関わりのある分類群を研究したいと考えた。そのため、館先生の研究されているヤドリバエ科も考えたが、先生からイエバエ科の農業上重要な分類群を研究してはどうかと言われ、イエバエ科のクキイエバエ属の分類学的研究に着手した。

イエバエ科のクキイエバエ属は幼虫が植食性であり、イネ科草本を食害する*Atherigona*亜属と幼虫が腐食性である*Acritochaeta*亜属の2グループによって構成され、他の双翅目昆虫では見られない特徴的な形態形質を有している。そのため、農業上重要であるだけでなく、生物学的にも興味深い分類群であるが、日本における本属の分類学的研究はあまり行われていないため、修士論文の研究題目として、日本産種の分類学的研

○○○ 博士論文を書き終えて

究を行った。その結果、日本には既知種の倍以上の種数が生息しているということが明らかとなり、さらに、本属の形態形質の相同性についても議論することができた。この分類群は研究対象として興味深い分類群であったが、諸事情により、博士後期課程からは別の分類群の研究を行うことにした。

博士後期課程での生活

博士後期課程に進学してからは、修士課程の時に研究していたクキエバエ属と同様に農業上重要であり、日本をはじめとするアジア地域において分類学的研究が遅れているハナレメイエバエ亜科の分類学的研究を行うことにした。ハナレメイエバエ亜科は他の小昆虫類を捕食する分類群であり、ブユやユスリカなどの衛生害虫、コナジラミなどの農業害虫を摂食することから、ヨーロッパやアメリカなどでは捕食性天敵として注目されている。また、この亜科はイエバエ科の中では比較的系統的によくまとまっている分類群であると考えられており、幼虫が陸生、または水生の種を含んでいるため、昆虫類の環境適応に関する研究を行う上で適していると考えていた。

GCOEや決断科学大学院プログラムにも参加しながら、研究を進めていく過程で、アジア地域から未記載や未記録の種を発見することができたが、生態情報の調査がうまくいかなかったことや、博物館からタイプ標本を借りることが遅れたことから、在籍年数が1年増え、日本産種の再記載が主である、分類学的な基盤情報を構築することで博士論文をまとめる結果となった。修士課程に扱ったクキエバエ属とは異なり、単系統性などに問題がある分類群を扱ったため、安定した分類体系を構築するためにはどの形態形質に基づいて体系化すれば妥当であるかということも考えたが、タクソンサンプリングの問題等から、系統解析に基づいた分類体系の評価などができなかつたことは反省すべき点である。また、応用昆虫学と多様性生物学の2つの観点から本亜科を研究対象として選んだものの、最終的な研究目的を明確な1つのものに絞らなかつたため、計画性がなくなり、博士論文の構成も難しくなつたことから、主軸をどちらにするかを早めに決めておくべきであつたと思う。私が標準年限で学位が取得できず、指導教員の先生方にご迷惑をおかけすることになったのは、これらのことがうまくできていなかったからであり、私の二の舞を踏まないための参考にして頂ければ幸いである。

最後に

修士課程から比較社会文化学府に入学し、以前に所属していた研究室とは方針などが大きく異なる環境であつたため、戸惑うことが多かつた。研究室の方針以外にも、GCOEや決断科学大学院プログラムにも所属していたため、大学院での生活の6年

間は、多くの人に関わる機会を得た。そのため、多くの考え方や価値観に触れ、ある人には肯定され、別のある人からは批判されるといったことがあつた。これらのことから、戸惑いや迷いが生じ、自分は翻弄されたことも多かつたと感じている。このような理由により、自分の研究していることや将来に不安を感じ、何も手につかない時期もあつたが、休息をとりながら、論文を読んだり、採集に行ったりして、八方ふさがりの状況を打開しようとしたことにより、どうにか学位を取得し、就職することができたため、行動し続けることが何より大切であると実感した。

私自身の主観的な考えではあるが、研究に対する熱意を持ち続け、研究成果を出すためには、自分の行いたい研究をすることによって最も研究成果が生まれる研究対象を選ぶ、あるいは自分の研究したい研究対象をどのような観点で研究すれば優れた研究成果を出せるかを工夫することが重要である。また、大学院生活で得た能力を活かせる職に就くためには、早い段階から、将来の就職先を考えて行動すること、研究して身に着いた能力を活かせる就職先や自身の能力をどのようにアピールするかを考えておくことが重要であると感じた。これらのことは、就職した後、企画などを行うときにも生きてくる能力になると考えている。最後ではあるが、これまでに私が記してきたことが少しでも参考になり、学位取得と就職の助けになれば幸いである。

謝辞

研究や進路に関することで、館卓司先生、阿部芳久先生、荒谷邦雄先生、楠見淳子先生、松尾和典先生（九州大学大学院比較社会文化研究院）、小野展嗣先生、野村周平先生、西海功先生（国立科学博物館動物研究部）、末吉昌宏先生（森林総合研究所九州支所）、細谷忠嗣先生、杉本めぐみ先生、村上貴弘先生、鐘江嘉彦先生、鈴木大先生、布施健吾先生、矢原徹一先生（持続可能な社会のための決断科学センター）、岡島秀治先生、小島弘昭先生、石川忠先生（東京農業大学昆虫学研究室）、三田敏治先生（九州大学農学部昆虫学教室）、三枝豊平先生、寫洪先生（九州大学名誉教授）をはじめとする多くの方々にご助言をいただきましたため、この場を借りて心から感謝の意を表します。また、6年間私の研究指導をしてくださり、本稿のご依頼をくださった館卓司先生に重ねてお礼申し上げます。

地球社会統合科学府修士課程での学びを通して

高久 彩

(地球社会統合科学府)

(包括的東アジア・日本研究コース)

私は、2016年4月に九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程に入学しました。現在、論文提出期日も間近となり、論文完成に向けてあと一歩という段階に入りました。

私の修士論文の題目は、「明治政府の『復古』と『博物館』の成立—1882年(明治15年)に博物館が上野公園に開館するまで—」です。本稿では、明治初期の国家が「復古」の理念に基づいて、どのように「博物館」を形成したのかという点について検討しています。

近現代社会では、ミュージアムは一般的に世俗化された国民国家を基盤として形成され、国民の教育を目的とする公共の施設と認識されています。しかし日本では、1882年に国家の博物館として「朝廷ノ博物館」(東京国立博物館の前身)が開館しました。この「博物館」の形成は、「神武創業」という「復古」に基づいた明治政府の国家の確立と軌を一にしていました。

明治政府は「近代的」な国家を形成するために、「復古」に基づいて祭政一致を実現しました。そこでは神仏分離が行われ、神祇官が再興されました。神祇官は神社制度や天皇が行う祭祀を確立し、従来の即位式や大嘗祭を改変して国家の大礼として実施しました。そのような中で、1872年に文部省博物館が開催した博覧会(明治初期の博覧会は博物館制度の成立と密接に関わっています)に、神祇省(神祇官の後身)の職員および教部省(神祇省の後身)が土器や古玉、そして古鏡、古剣などを出品していたことを知りました。

これらの歴史的事実から、ミュージアムの公共性は世俗化がなされて成り立つと言われているにもかかわらず、国家が祭政一致を行い、「博物館」を創設するということはどのような意味を持つのだろうかという疑問が生じました。本稿はこの疑問の解明を目指すものです。

このような研究に至った経緯は、私が九州国立博物館に在職している時に、日本の博物館収蔵品とそのデジタル情報の管理のあり方に疑問を抱いたことに始まります。欧米では明確な政策や目的を掲げて文化財デジタルアーカイブ事業が展開されているのに対し、日本では収蔵品管理と収蔵品デジタルアーカイブ管理との断続性や情報公開の点で閉鎖性があるのではないかと、その要因は何に起因するのかということを知りたいと考えました。そこで科学研究費補助金奨励研究を通じ、欧米のミュージ

アムにおける収蔵品管理の動向、日本の国立博物館の成り立ちを考察し、研究成果を公表しました。

その研究を通じて、日本における博物館制度の成立過程について一定の知見を得たものの、現在の社会的ニーズに沿った博物館のあり方を検討する上で不可欠となる、ミュージアム制度に立ち返った歴史的考察を十分に行なうには至りませんでした。そのため、地球社会統合科学府に入学し、明治政府がどのように「博物館」に関わる諸制度を構築したのかという点を明らかにしたいと考えました。

このような問題を研究する上で、地球社会統合科学府修士課程のカリキュラムは非常に示唆に富む内容でした。必修科目の「地球社会統合科学」および「地球社会フィールドワーク調査法」では、先生方が取り組まれている研究の内容や研究方法を伺うことを通じて、様々な研究分野の「ものの見方」や調査方法とともに、積極的に各分野の枠を越え、多様な視点を持ちつつ柔軟に思考することの重要性を学びました。なかでも、生物の進化や多様性についての講義では、人間以外の昆虫などの生物の営みを通じて、人間社会の「歴史」や「文化多様性」について気付かされたことが多くありました。

また演習では、くずし字で書かれた文書を正確に且つ批判的に読むことを学びました。この訓練により、修士論文では、これまで注目されることのなかった文書を史料として活用しつつ、「博物館」について考察することができました。

別の演習では、欧州連合からの英国脱退の背後に見られた「グローバル化」と「ネーション」との問題や「世界遺産」の問題など「地球社会」が直面する課題を「地球社会」を構成する一員として考え、他の学生の方々と議論を通じて思考を深めることができ、大変有意義でした。

ここで習得した「ものの見方」は、「博物館」についてミュージアムの観点から理解を深めるためにも欠かすことができません。ミュージアムをめぐる国際的な動向や、様々な学問領域に触れることを通じて、今後も引き続き研鑽を積んでいくつもりです。

最後にご指導を頂いております主指導教員の中野等先生、副指導教員の古谷嘉章先生、永島広紀先生をはじめ、演習の諸先生方や本学府の皆様方にお礼を申し上げます。今後ともご指導の程どうぞ宜しくお願い申し上げます。

「越える」社会人学生

高橋 優子

(地球社会統合科学府)

(地球社会統合科学専攻)

「『CROSSOVER』に社会人学生として寄稿してもらえませんか?」そう依頼が来たのは10月の終わりごろだったでしょうか。何を書こうかあれやこれやと考えましたが、誌名の『CROSSOVER』にちなんで「越える」をキーワードに、私の社会人学生としての生活をご紹介しますと思います。

身分を「越える」

この寄稿のテーマからすでにおわかりのように、私は2016年4月から、学生と社会人という2つの身分を持っています。これを読んでいる皆さんの中には、「社会人学生は大変なのでは?」「学業と仕事の両立は難しいのでは?」と思う方もいらっしゃるのではないのでしょうか。答えは一人ひとり異なると思いますが、私の場合、「大変です。ですが両立はできます。むしろ、社会人学生であることが役に立っています」となるでしょう。

私は高校生の時にあるきっかけで日韓関係、特に歴史認識問題に関心を持つようになり、学部と修士では東アジアのエリア・スタディーズを修めました。大学での学びは知的刺激に溢れ、趣味のバレエと音楽以外は勉強漬けの学生生活を送っていました。

ですがその一方で、違和感を抱くようになっていました。というのも、日韓関係に関心を持ったとき私は英国に住んでおり、大学時代もそのまま英国にとどまったので、アジアを直接知らないままアジアの事を学んでいるにすぎない、知識だけの頭でっかちになっている気がしてきたのです。私の出発点は、歴史認識を巡っていまだに悪化と改善を繰り返す日韓関係に関心を持ったことです。そして韓国や日本では、日韓友好のため実際にさまざまな活動をしている人たちがいる(に違いない)。そんな人たちの活動を知らず、ましてや自分自身が実社会での活動をしたこともないままアジアの外でアジアの研究を続けていくことに、疑問を抱くようになりました。

そこで拠点を日本の広島に移し、仕事を始め、社内翻訳・通訳を経て現在は広島の大学の事務局に勤めています。そうして生活基盤を築いた上で、日韓政府の親善交流事業参加、山口県国際課の国際理解推進講座への講師としての参加、日本人と在日コリアンによるアンサンブルの立ち上げ・演奏活動など、さまざまな市民活動をしてきました。

同時に学問への関心も捨て切れず、2年前に地球社会統合科学府博士後期課程に入学し現在に至るわけですが、学生と社会人という2つの身分を持つての研究生生活では、学業と社会人生活で得る経験や人脈が相互に補完し合いながら生きており、さらに市民活動を通して得るものも助けになっています。仕事や市民活動で得た人脈が資料調査やインタビューに役立ったり、市民活動を通して感覚的にわかってきたことが研究での考察にヒントを与えてくれたり、仕事での業務の進め方や研究での物事の考え方が相互に役立つこともあります。理論と実践の両輪を確立するには学業と市民活動だけでも十分かもしれませんが、私の場合、勤め先が大学ということもあり、社会人という身分も結果的に大いに役立っているのです。

学業と仕事の両立は大変ではないかとよく聞かれます。確かに、通常平日の昼間は研究に時間を使えないなど制約もありますが、私は幸いにも主指導教員の三隅先生をはじめ九州大学の教職員の皆さん、そして広島の職場の皆さんの寛大な理解とサポートを得られ、社会人学生にしてはかなり自由な、そして研究の面でも有意義な学生生活を送らせてもらっています。



2017年5月、1200年の歴史を持つ宮島・大聖院で
時空を超えて(?)演奏(左から4人目が筆者)

県境を「越える」

「九州大学の学生かね。ほいじゃあアンタ今日は九州から来たんね。え? 広島で働きよ? ほいじゃあ今は広島に住んどるの? は? 家は(山口県)岩国? ほいじゃあ毎日汽車(本当は電車)で通いよるの? まーご苦労じゃね。」

広島・長崎の在日コリアン被爆者について研究している私が、インタビューで初めてお会いする方とよく交わすやりとりです。初めころは説明がややこしくて申し訳ないと思っていましたが、今は自己紹介の一部として、相手に自分のことを覚えてもらうのに役立っていると思っています。

私は、社会人学生であると同時に遠距離通学者でもありません。山口県に住み、広島県で働きながら、福岡県の大学に通っています。(ただし、住まいのある山口県岩国市は広島市から電車で1時間ほどの所なので、さほど遠くありません。)ただでさえ社会人学生であるため時間の融通が利かないことも多いのに、地理的に所属大学から離れていることで、さらに不自由を強いられることが少なくありません。ですが、これも大学の皆さんの理解とサポートのおかげでなんとか不便さをカバーしながら、充実した学生生活を送ることができています。

なにより、被爆者をテーマに研究している者として、“現場”の広島が生活の拠点であることは強みです。資料調査やインタビューにはいつでも行けますし、情報も得やすく、人のネットワークも広げやすいという利点があります。

そして、前述した市民活動も、費やす労力や時間は以前に比べて減らさざるを得なくなったものの、広島にいて継続できています。仕事と同様、これまで続けてきたこと、積み重ねてきたことをやめてゼロから始めるのではなく、継続しながら学問の道にも進めたことで、英国時代に抱いていた東アジアの実社会との乖離というジレンマを感じることなく、学業に励むことができています。

一番大事な研究に有利に働き、これまでの活動も継続でき、ついでに遠距離通学者であることが印象に残る自己紹介するのに役立っていることも考えれば、県境を越えながらの学生生活も、意外と悪くないと思っています。

分野を「越える」

小山内学府長は学際部局である本学府での学びの特長を、古谷前学府長の言葉を基に次のように表現なさっています。

「学府が設定した『定食』的なカリキュラムではなく、院生自らが、文・理の垣根を越えた多様な科目群(料理メニュー)の中から、将来目指す方向に沿って最大限の力を発揮できるような科目(料理)を選択し、各自がもっとも良いと思う独自の受講・研究計画(献立)を作成すれば良いのです。」

私は博士後期課程の学生であるため特定のコースに配属されているわけではありませんが、包括的東アジア・日本研究コースを有する本学府は、Korean Studiesを自分の領域としたい私にはうってつけの環境です。本学府や箱崎の韓国研究センターには、さまざまなディシプリンやテーマで韓国・朝鮮関連の研究

をしている先生方が多くいらっしゃいます。私の研究では、在日コリアンの歴史、朝鮮半島の政治、アイデンティティの問題など、ディシプリンの垣根を越えた多角的視点が必要となります。その意味において本学府(および九州大学)では、私の研究テーマや関心に合った先生や演習を選んで、ディシプリンの枠を越えた私専用のKorean Studiesの献立を立てることが出来ます。あとは私の料理の腕(研究成果を出す努力と能力)にかかっている、といったところでしょうか。

前述のように、私はこれまでエリア・スタディーズを専攻してきました。エリア・スタディーズも学際的分野ですが、学際的アプローチは多角的視点を持てるという利点を持つ一方で、自分の軸足を置く分野を持たないままとなる可能性もあります。特定の分野しか知らない、見ない、というのでは通用しませんし、かといってあれこれ手を広げて“広く浅く”になってもいけない。果たして自分がこうしたジレンマを克服できるかまだ自信はありませんが、自分の軸足を固めつつ均衡のとれた学際性を修得するため、伝統料理の流儀を踏襲した独自の創作料理の献立を考えながら、これからも研究に励んでいく所存です。

以上、「越える」をキーワードに、私の社会人学生生活の一端をご紹介しました。仕事との両立に苦悶しながらも志高く学業に励む社会人学生の苦労話を期待していた人には、少し肩すかしを食らったような感があるかもしれません。ですが、研究テーマ次第では、そして支えてくれる人たちや環境に恵まれていれば、少々の不便さにも勝る利点が社会人学生の研究生活にはあると思います。ほんの小さな一例ではありますが、私の学生生活の紹介が、地球社会統合科学府の皆さん、あるいは本学府に関心を持っている方たちの参考になれば幸いです。



2017年10月、国境を越えドイツで行った学会発表にて

○○○ 大学院データブック

平成29年度博士学位(課程博士)取得者及び論文題目一覧(大学院比較社会文化学府)

授与番号	学位の種類	(フリガナ) 氏名	専攻	博士論文名	授与年月日
比文博甲 第278号	比較社会 文化	サト ムラ ワカヨ 里 村 和歌子	日本社会 文化	主婦とオルタナティブ労働 一元論的分離の 間にある典型的でない労働に注目してー	2017年 5月31日
比文博甲 第279号	比較社会 文化	サ トウ ケイ ジ 佐 藤 慶 治	国際社会 文化	明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成	2017年 5月31日
比文博甲 第280号	比較社会 文化	モ ハ メ ド シ ャ ミ MOHAMED CHAMI ム ク ボ ア ア ブ デ ウ ル カ ハ ル MKOUBOI ABDOLKAHAR	国際社会 文化	The Recruiting Strategies and Mechanisms of the Egyptian Muslim Brotherhood under Authoritarian Regimes (権威主義体制下のエジプト・ムスリム同胞団の 動員戦略についての研究)	2017年 7月31日
比文博甲 第281号	比較社会 文化	バルトシュ ヴォランスキ Bartosz Wolański	日本社会 文化	Gender and cultural differences in linguistic constructions of identity in Japanese and Polish (日本語とポーランド語におけるアイデンティ ティの言語的構築に見られるジェンダー差お よび文化差)	2017年 9月30日
比文博甲 第282号	比較社会 文化	グレゴリー ジェームズ Gregory James オキーフ O'Keefe	日本社会 文化	The typological hybrid identity formation of long-term western foreign residents in Japan (日本に長期滞在する欧米人に関するハイブ リッド・アイデンティティ構造の類型論的研究)	2017年 9月30日

平成29年度博士学位(論文博士)取得者及び論文題目一覧(大学院比較社会文化学府)

授与番号	学位の種類	(フリガナ) 氏名	博士論文名	授与年月日
比文博乙 第47号	理 学	ミス ノ クニタロウ 水 野 邦太郎	Graded Readers の読書を通して「主体的・対話的で深 い学び」を実現するための理論的考察 ーH.G.Widdowson の Capacity 論を軸としてー	2017年 9月30日

※平成 29 年度 9 月末現在



九州大学



伊都キャンパスセンターゾーン



比文・言文研究教育棟

広報情報化推進委員会よりおしらせ

『クロスオーバー』に寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし地球社会統合科学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第2回広報情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編集後記

ここに「CROSSOVER」43号をお届けいたします。地球社会統合科学府が発足してより4年が経過し、修士・博士課程を卒業した方々の多方面での活躍が聞こえてくるようになりました。また、本号の記事からも分かるように、在学生の方々の頼もしい奮闘ぶりも多く目にする事ができ、今後が非常に楽しみです。地球社会統合科学府は、2018年度より伊都キャンパスのイーストゾーンへ移転します。新キャンパスにおける本学府の取り組み、奮闘ぶりにもぜひご注目ください。最後に、編集にあたり執筆者とその関係者、広報・情報化推進委員会の皆様には大変お世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

広報・情報化推進委員会 クロスオーバー編集担当 : 林 辰弥

ISGSのロゴの説明



新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発行者 九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月 2018年3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744

TEL : 092 (802) 5786・5787

FAX : 092 (802) 5791

ホームページ : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/>